
ゼロの使い魔 ギーシュとして.....

amon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ギーシュとして……

【Zマーク】

Z2539M

【作者名】

amon

【あらすじ】

普通の大学生だった主人公が、何故か『ゼロの使い魔』の世界に、よりによって『ギーシュ』として転生してしまお話し。しかも、チート能力を得て、かなり強力なギーシュに生まれ変わり、原作に食い込んで行く……。

注意) チートやら転生やらを初め、設定を気になさる方は引き返してください。

プロローグ 生まれ変わって……（前書き）

注意）この作品はフイクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

プロローグ 生まれ変わつて……

プロローグ

「オギヤ～！オギヤ～！（ん？なんだこれ？）」

気がついてみれば、赤ん坊になつていた。

もう一度言おう。なんだこれ？

「あらあら、どうしたの？」

誰だ、この金髪美人？

「うあ、うわ」

抱き上げられて、俺の意志とは関係なく泣きやんだ。

「おしめは濡れてないわね。じゃあ、お腹がすいたのね」

もうこうと美人は、服をはだけておっぱいをポロリ…… もう、美
乳

「ああ、おっぱいをあげましょうね」

「あら～……んぐ、んぐ……」

身体が勝手に美乳に吸いつき、母乳を吸つ。

飲みながら、記憶を追つて考える……。

俺は確かにさうまで大学のコンパで仲間や女の子達と飲みに行つてたはずだ。

で、揃いも揃つて酔っぱらつて……お開きになつて……仲良くなつた女の子なんかとメアド交換して……俺は電車に乗つて帰つたはずだ。

それから……家の近くの駅で降りて……家に向かつて歩いて……
それから……それから……?

あれ?なんでだ?そこから記憶がブツツリ途切れてる……?

『説明しよう』

な、なんだこの声!?

『私は君達が神と呼ぶ存在だ』

はい?

『まあ、聞きたまえ。結論から言おう。実は、君は死んでしまったのだ』

はあッ!…?どうこういとだッ!…?

『まあ、落ちつきたまえ。これから順を追つて説明するから』

最初から順を追つてくれよッ！－！

『我々は、数多の虚数時空間を管理する高位次元の存在　君達人間がしばしば、神と呼称する存在だ』

俺のツツコミニ無視して勝手に説明始めやがった……。

『今回、偶発的に次元震が発生し、それに運悪く、君は巻き込まれて消し飛んでしまったのだ』

な……なんだとおおおおツツ！－！？？

『ショックなのは分かる。しかし、事実なのだ。あんな不運に見舞われた三次元存在は、全宇宙において君が史上初だ。いや、不運だつたとしか言い様がない』

お、俺が……死んだ……って、ちょっとまで！

じゃあ、なんで俺はこうして赤ん坊になつて美人の美乳を吸つてんだよ！？

『余りの不運ぶりに、これは何らかの救済措置を取るべきだということで、他の高位次元存在達と意見が一致したのだ。そこで、君には記憶と人格をそのままに、さまざまな特典と共に別次元に転生させた、という訳だ』

て、転生いい！？

『そうだ。君の魂を一部解析し、君が望む次元世界を調べて選び、そこに転生させた。全宇宙初の大不運に見舞われた分、そこで新た

な人生を謳歌するといい

い、いや……謳歌するといいつて言われても……。

『では、説明を終えたところで、私はこれで失礼する。これ以降、君に接触を持つ事は絶対にない。では、グッドラック!』

あ、ちょっと……！

ダメだ……何となくあつた存在感が消えた……。

はあ……何だか頭が追い付かねえな……。

……まさか、転生とは……。

でも……俺が望んでた世界って……一体……？

ガチャツ！

「今帰つたぞ！クリスティーナ！我が愛しの妻よつ！」

なんか、金髪金髪のオッサンが、勢い良く部屋に入つて來た。

あ～、もしかして……あのオッサンは、俺の新しい親父で……この美人は、俺の新しいお袋？

「あなた！そんな大声を上げてはいけませんーギーシュが泣いてしまいますわ！」

どうやら、俺の名前は『ギーシュ』っていうらしい……って、な

んだと？

「おお～いかんいかん！つい勢い余ってしまった！あつはつはつはつー！」

「もひ、あなたつたら。この子が生まれてから、そればっかりですわね」

「勿論だとも当然だとも…愛しの妻との間に授かった、我が子なのだ！それが四人目であるうとも、喜ぶに決まっているではないか！」

「つふふふ、あなたつたら…」

夫婦の会話が続く中、俺は得られた情報を整理する。

分かつた事は、お袋の名前は『クリスティーナ』で、俺の名前が『ギーシュ』だということだけ……。

だが、この『ギーシュ』といつ名前には、どうも嫌な予感がする……。

「お～！今日も元気に乳を飲んでいるな、ギーシュ…流石は、このナルシス・ド・グラモンの息子だ！」

嫌な予感が倍増する……。

ナルシス……これは確か、ライトノベル『ゼロの使い魔』のスピノオフ作品『烈風の姫騎士』に出てきたナンパ男の名前だ。

まさか……神様、あんたまさか……。

「もひ、あなたつたら。大袈裟ですわよ？」

「そんなことはない！見なさい、この子の顔を…この私そつくりの
凛々しさ…息子達は、皆、私似の美形揃い！トリステイン王国武門
の誉れ高きグラモン伯爵家の将来は安泰だ！あ～はつはつはつ…」

あ～あ……確信が持てた……。

……神様が、俺の願望から選んだっていつ……この世界は……『
ゼロの使い魔』世界だ。

そりや、ネット上の転生物の一次創作を呼んで「良いな～」とか
思つたりしたけども……。

神様、何も『ギーシュ』として転生させなくとも良かつたんじや
ないかい？

プロローグ 生まれ変わって……（後書き）

訂正しました。

ギーシュは因界でした……。公式設定を間違えて覚えていました。

Hペソード1 原作が始まって……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

Hペソード1 原作が始まつて……

Hペソード1

神様に『全宇宙史上初の大不運』とまで言わせる死に方をして、俺が『ゼロの使い魔』世界の貴族として転生してから……。

あつー…という間に17年の月日が経つた……。

過ぎてみると、駆け足の17年だった。

身体が赤ん坊だった所為か、起きてる時間が短くて、先ず物心ついて自由に動けるようになるまでが短く感じられた。

物心がつくまでがおよそ3年……それからの2年ぐらいは、自分の事を把握するのに使つた。

ネットに転生物の一次元創作にはよくあつたが、まさか自分がこの世界に転生することにならうとは、思ってもよらなかつた。

俺は『ギーシュ・ド・グラモン』トリスティン王国の貴族、グラモン伯爵家の四男。神様の御厚意?で、原作のボケ役としてストーリーに深く関わる男に、転生してしまつた……。よりもよつて……。

親父の名前はナルシス、お袋の名前はクリスティーナ、そして兄

貴が三人もいる。

家族仲は良い方だ。親父は度々、浮氣紛いの事をしてお袋にブチのめされてるが……基本的に仲が良い。兄貴達も、弟の俺を可愛がってくれた。

屋敷で働く執事やら使用人やらメイドやらも結構良い人ばかりなので、生活環境は良好だ。

それに……四男つていうのも、俺的には良い。面倒な家督を継ぐ必要がないから、ある程度、気楽に生きていく。

で……次は、俺自身のポテンシャルの事だ。

神様が言つていた『さまざまな特典』……転生で特典と言つて思い浮かぶのは、チートオリ主やら最強主人公やらだ。

結論から言つと、その想像は当たつていた。しかも、俺は相当優遇されたらしい。

まず知能　　3歳の時、こつそり親父の書斎の本を開いて見てみたんだが、習つてもいはずのハルケギニア文字が全部読めた。しかも、一度読むと内容を全部覚えられる。

次に身体　　17歳の現在、俺の身長は186センチ　原作のギーキュよりも11センチも高く、前世の俺より6センチも高い。顔は前世と違つて、まあまあハンサム（ちくしうめ……）。髪は癖つ毛がウザつたかつたんで、コツソリ買った秘薬でもつてストレ

ートに矯正し、オールバックにした。

その上、大して鍛えてないにも関わらず、身体はがつしりと細マツチヨ 短距離、長距離とも金メダルレベルの脚力。100キロぐらいの物なら持ち上げられる腕力。

多分、超人の領域に半歩ぐらい足を突っ込んでるだろ？

そして最後に魔法 これが1番チートっぽい。

本で調べて簡単な杖を作り、バレない様に隠れて試してみた結果 土系統の魔法が、スクウェアクラス以上に使えた。『鍊金』で、拳大の石をまるごと金塊に変えてしまったぐらいだ。しかも、いくら使つても『精神力』が切れない。どこのプロア ションリプレイですか、と。或いはロー フリークでも可。

ただ……さすがに他の系統はそこまではいかず……『火』と『水』はトライアングルぐらい、『風』は相性が悪いのかラインぐらいが限界だった。

だが、充分だ。何しろ、俺は『鍊金』で黄金が作れるワケで、つまり資金面はバツチリなワケで、仮に家を出なればならなくなつたとしても、俺は何処でも生きていける。その気になれば、ゲルマニアに行つて貴族になることも可能だ。

これなら、問題なく生きていく。

あ、ちなみに……俺はよくある転生系SSSの主人公とは違い、領

地の運営には一切関わっていない。

確かに、読んだ本を覚えられる能力があり、前世の知識もあるにはある。が、そもそも前世の最終学歴が経済学部の大学一年生……しかも大して真面目に勉強してた訳でもない。

その程度の知識じゃ、領地繁栄なんて大それた事出来るわけないし……下手にそんな事をして、万が一、俺が家の跡取りに選ばれてもしたら面倒だからな。

で、今年は原作開始の年　つまり、俺がトリステイン魔法学院に入学してから1年が経った年だ。

俺は原作のギーシュとはまた違つ、自分らしいギーシュ・ド・グラモンとして日々を過ごした。この1年は、中々楽しい日々だった。

入学早々、ヴァリエ・ド・ロレースとトネー・シャラントその他大勢の女子達が、黒焦げアフロの全裸で塔から吊るされたり……。

太っちょのマリコルヌや、生真面目眼鏡のレイナールと友達になつたり……。

同級生の女子から何度も告白されて、全て断つたり……、その中でモンモランシーもフツた……。入学から半年ぐらいした時に、意外にも向こうからアプローチがあつたんだ。

ただ……その時の言葉が……

「お、お付き合にしてあげても……良こわよつ？」

だつたもんだから……、つい呆れてしまつて……

「結構だ」

の一言でフツてしまつた。原作のギーシュはともかく、俺はモンモランシーみたいのは好みじゃない。

モンモランシーは食いつがつてきたが、俺はハッキリこう言つてやつた。

「お前は、些細な事でも浮氣だ何だと、煩そつて面倒臭そつだ」

そしたら、モンモランシーは平手を見舞つてきて（勿論、避けた）、泣きながら走つて行つた。

その時は、悪い事をしたような気がしないでもなかつたが、原作のギーシュよりはずつとマシだろつ。

とまあ、そんな感じで面白可笑しく学生生活を送つてきて、今日で一年……『春の使い魔召喚』の日を迎えた。波瀾万丈の『ゼロのロゼ』が、ここから始まるー。

といつ訳で、新一年生の俺達は、全員学院の中庭に集められた。

「こよこの今日本、召喚の儀式あります」

「ルベールのオッサンが、俺達を見渡す。

「これは、一年生に進級する為の重要な試験であり、貴族として一生を共にする使い魔との神聖な出会いの儀式であります」

「うう言えば、俺はどんな使い魔が来るんだろう…やっぱり、ジャイアントモールか？」

出来れば別のカツコイイ使い魔が良いなあ……。

「どんな使い魔が来るかな～？楽しみだな～！」

隣のマリコルヌが、ワクワク声で言った。

「使い魔は、それ、それにお似合いの動物が来るって話だからね。僕は水属性だから、水辺の生き物。マリコルヌは風属性だから、空を飛ぶ生き物が来るんじゃないかな？」

レイナールが眼鏡の位置を直しながら見解を述べる。

「使い魔は一生もんだからなあ。変な動物を呼び出しちゃったら、一生笑い物だな」

「はは……まあ、それはそうだけだな」

俺の意見に、レイナールが苦笑いを浮かべる。

で、召喚は始まり、どんどん進む。

様々な動物が召喚され、生徒達は使い魔として契約を交わしていく。

その中で我が友人達 マツコルヌはフクロウ、レイナールはカワセミ、それぞれ召喚した。

そして、俺の番……。

「我が名はギーシュ・ド・グラモン。五つの力を司る五芒星、運命に導かれし、我が使い魔を召喚せよ」

定番の呪文を唱えて、自作した長さ80センチのロッドタイプの鉄の杖をちょいと振る。すると、他の連中と同じように召喚のゲートが開いた。

そこから出てきたのは……

『ガルルル……』

虎だつた。中々良い毛並み、良い顔つき、立派な体躯 これら乗る事もできそうだ。

良かつた、ジャイアントモールじゃなくて……。

さてと……。

「我が名はギーシュ・ド・グラモン。五つの力を司る五芒星、この者に祝福を与える、我が使い魔となせ」

呪文を唱え、契約のキス　すると……

『フギヤン！』

虎が少し痛がり、その額に『使い魔のルーン』が刻まれた。

これでこの虎は、俺の使い魔だ。

「よ～しよ～し、よく耐えたな。偉い偉い、今日からよろしくな

『フギヤア～＼＼＼＼＼＼……』

お～、ジャレついて可愛い奴だ。団体デカいけど。

「完了しました、『ルベル先生』

「うむ、お見事でした。ミスター・グラモン」

ゴッパゲのコルベールが頷き、俺の番が終わった。

召喚した虎を連れて、俺はマリコルヌとレイナールのところに戻る。

「おかげり、ギーシュ。いや～、中々の使い魔を呼んだな～！」

「虎は密林に住み、地を駆ける動物だからね。土属性のギーシュには似合ひの使い魔かもしれないね」

マリコルヌとレイナールが、それぞれ称賛の言葉をくれた。

「ありがとよ」

俺はジャレつゝ虎を撫でながら答えた。

早いところ、こいつに名前を付けてやらないとな……。

あ、そうだ。思い付いた。『サンガ』にしよう。

その後も、召喚は続いた……。

中でも注目を集めたのは、『微熱』^{ヒート}のキュルケと『雪風』^{ウインド}のタバサだ。キュルケは火蜥蜴^{サラマンダー}、タバサは風竜^{ホンドラゴン}(ホントは風韻竜)をそれ召喚した。

「え、と、これで全員ですか?」

コルベールのオッサンは、周りを見渡して言ったが、まだ肝心のヤツが召喚していない。

「いいえ、ミスター・コルベール!」

そう声を上げたのは、キュルケだった。

「まだ、ミス・ヴァリエールが召喚していませんわ」

あいつも性格悪いなあ。俺も人のこと言えた義理じゃないけど。

で、後ろの方でコソコソしてたルイズが前に出て来て、召喚を始めた。なんだが……

ドカーンッ！

の、繰り返しだ。もう何回目だらう……？

ホントに才人が呼び出されるのが、俄かに不安になってきた……。
もし、才人が呼び出されなかつたらどうなるんだ？なんて考え始めた時だった。

「宇宙のどこかにいる、我が僕よ！」

「「「「「はあ？」」」」

突然、ルイズが変な呪文を唱え始めた。

なんだあの呪文？あんな詠唱、聞いた事ないぞ？原作はいきなり
「あんた誰？」から始まるから、どういづ召喚がされたのかは書いてなかつたんだよな。

「神聖で、美しく、強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ。
我が導きに、応えなさいッ！」

で、ルイズが杖を振り下ろす。

ドカアーアーンッ！

さつきより爆発の威力が強いが、結局爆発だ。

と、思つたんだが……

「お?」

煙が晴れると、黒髪に青いパークーにジーンズにスニーカーが見えた。特徴が一致している。間違いないな、あれが平賀才人だ。

ふう〜、無事に才人が召喚されたな。よかつた、よかつた。

「あんた、誰?」

原作通り、ルイズは現れた才人に声をかける。一方、才人は、最初氣絶していたが、今は目を覚ましてキヨロキヨロ周りを見渡している。

「誰つて……。俺は平賀才人」

「どこの平民?」

ルイズが聞いても、才人は「訳が分からぬ」って顔をするばかりだ。まあ、無理もないだろうけど。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してびつするの?」

「「「「「あはははははっ……」」」」

誰かがそう言つと、周りの連中が笑い出す。

「ちよ、ちよつと間違つただけよ。」

『サモン・サーヴァント』に間違いもクソもない。どんな使い魔が来るかは、運命だからな。

「間違ひって、ルイズはいつもそういうじやん」

「さすがは『ゼロ』のルイズだ！」

周りの連中は爆笑し始める。

別に洒落でも何でもないし、大して面白くないけどなあ。

「ミスター・コルベール！」

周囲への不審感丸出しの才人を放置して、ルイズはコルベールのオッサンに駆け寄つた。

「なんだね？ミス・ヴァリエール」

「あのー、もう一回読み直させて貰いたい。」

「それは駄目だ。ミス・ヴァリエール」

ルイズの訴えを、コルベールのオッサンはあつさり却下。

「どうしてですか！？」

「決まりだよ。一年生に進級する際、君達は使い魔を召喚する。今、やっている通りだ。それによって現れた使い魔で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した使い魔は変更する事はできない。何故なら『春の使い魔召喚』は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼を使い魔にするしかない」

まあ実際は、ここで無理に使い魔契約をしないといつともできる。代わりに、留年か退学になつて、この先新しい使い魔は呼び出せなくなるけどな。

「でも！ 平民を使い魔にするなんて聞いた事がありません！」

「これは伝統なんだ、ミス・ヴァリエール。例外は認められない。彼は……ただの平民かもしけないが、呼び出された以上、君の使い魔にならなければならない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、『春の使い魔召喚』の儀式のルールはあらゆるルールに優先する。彼には君の使い魔になつてもらわなくてはな」

「そんな……」

ルイズはガッククリと肩を落とす。

「さて、では儀式を続けなさい」

それにしても……この時期のコルベールのオッサンて、割と容赦ないな。

「えー、彼と？」

「そうだ、早く。次の授業が始まってしまうじゃないか。君は召喚

にどれだけ時間をかけたと思つてるんだね？何回も何回も失敗して、やつと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ」

「そうだそうだ！」

「早くしなさいよ、『ゼロ』のルイズ！」

コルベールのオッサンの言葉と、周りの野次に押されるように、ルイズはチラッと才人を見て、しばし葛藤し……やがて諦めの溜め息を吐いた。

そして、徐に才人の前に歩み寄る。

「ねえ」

「はい」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

そう言って、ルイズは目を瞑る。そして、手に持った小さな杖を才人に向ける。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司る五芒星^{ペンタゴン}。この者に祝福を与える、我的使い魔となせ」

その後はまあ、原作通り ルイズは『コントラクト・サーヴァント』の呪文を唱え、ごねる才人の頭をガシッと掴んで契約のキス

をして……

周りから野次が飛んで、ルイズが言い返して、モンモランシーと小学生レベルの喧嘩をして……

オ人の左手の甲に『ガンドールヴ』のルーンが刻まれて……

「さてと、じゃあ皆、教室に戻るぞ」

オ人のルーンを手帳に書き^跡し終えたコルベールのオッサンの一言で、儀式はお開きとなつた。

オッサンが踵を返して『飛行^{フライ}』の魔法で飛んで行くのを見て、他の連中も飛び始める。

「終わりみたいだな。俺達も行こうぜ」

俺は、傍にいたマリコルヌとレイナー爾に声をかけた。

「そうだな。それにしても、最後に面白いものが見れたなーー! まさか平民を呼ぶなんて、さすが『ゼロ』のルイズだ!」

「人間を呼び出すなんて、相変わらずルイズは変わってるね

マリコルヌは愉しげ、レイナー爾は僅かに興味ありげ、とそれぞれ反応を示したところで、二人には先に教室へ行つてもうつた。

俺は、サンガに跨つて教室へ向かう。

遂に『ゼロの使い魔』が始まったか……これから俺の人生、面白くなると良いな。

Hペソード1 原作が始まって……（後書き）

使い魔を虎にしたのに、深い意味はありません。今年が寅年なので、そこからの思い付きです。

訂正しました。ギーシュは四男でした……。

Hペソード2 強引な決闘……（前書き）

注意）この作品はファイクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

少し加筆・修正しました。（7／2）

Hペソード2 強引な決闘

Hペソード2

使い魔召喚の、翌日……。

なんだ、布団がヤケにフカフカと暖かい……。

「…………ぬ？」

と、思つて目を覚ますと、俺はベッドじゃなく、床の上で……昨日召喚した使い魔、虎のサンガを抱いていた。

道理で、暖かくてフカフカな訳だ。

「ふああ～～…………んっ！」

「ロキー、ロキヰ！」

うへん、良い目覚めだ。サンガを抱き枕にして寝るのは良いな。
今後はベッドでやろう。

「サンガ、起きろ。朝だぞ」

『 ハリヤ…………？』

俺が揺ると、サンガはすぐに起きた。

『クア～～～……！』

サンガは前脚を伸ばして、欠伸をする。

さて……俺は身支度だ。

先ず、空の桶を用意する。そして、『水』系統の初步『凝縮』^{コンドンゼイショ}で、水を桶に溜める。

その水で顔を洗い、歯を磨く。ついでに、サンガの顔をタオルで拭い、歯も磨いてやる。

『フミヤアアア……ぶぐぶく』

サンガはちょっと嫌そつたが、清潔一番だ。

それが終わつたら、着換える。俺は、原作の様なフリフリのアホなワイスシャツではなく、普通の白いワイスシャツと黒のスラックスだ。

で、着替え終わつたら、朝食だ

「サンガ、行くぞ」

『フギヤアー！』

サンガを引き連れ、俺は部屋を出た。

俺は食堂に行く前に、厨房に寄つた。サンガの朝食を貰つ為だ。

「おい、ちょっと良いか？」

厨房の入口に近いところにいた、若いコックに声をかける。

「あ、貴族様！何でしょつか？」

「ウチの使い魔の朝食を頼みたいんだが」

『フギヤアー！』

「は、はいー畏まりました！」

そう返事して、『ツクは中に覗けて行つた。

「サンガ、食事が終わつたら、食堂の前で待つてるんだぞ」

『フギヤー。』

サンガの返事を確認して、俺は学院中央の本塔にある『アルヴィーズの食堂』に向かつた。

だだつ広いホールに、長い食卓が三列 それに生徒が席に着き、食事開始を待つている。教師連中は、ロフト中階で卓に着いて歓談している。

それにして……絢爛豪華な食堂だなあ。1年間、ここに通つて毎日二食の食堂で食つても、まだそつ思ひ。料理は美味しいけど

「よつ、と」

自分の席に座つて、食事開始を待つ。と、その時

「凄え料理だな！」

大声が聞こえてきた。

そつちに目をやると、才人がテーブルの料理を見て、目を輝かせている。

「こんなに食べられないよ。俺！ 参ったな！ ええおい！ お嬢様！」

騒ぎながらルイズの肩をポンポン叩く才人。行儀の悪い奴だ……。

そんな才人を、ルイズがジッと睨む。

「なにか？」

才人が尋ねるも、ルイズはジッと睨んだまま……。

「ああ、はしゃぎ過ぎだな、俺。貴族らしくしないとな！ 貴族じゃないけどな！」

まるで分かつてない……。つていうか、あいつ……どうして見ず知らずの異世界に来て、ああも平然としていられるんだろう？

これも『ガンドールヴ』のルーンの影響なのか？

そして、例によつてルイズは床を指さす。才人がそこを見て言つ。

「皿があるね」

「あるわね」

「なんか貧しいものが入つてるね」

そこで、ルイズは頬杖をついて言い放つ。

「あのね？ホントは使い魔は、外。あんたは私の特別な計らいで、
床」

「この頃のルイズは……正直、クソだ。反吐が出る……。

「これから一年ぐらいかけて、徐々にまともになつていくんだろう
が……。」

そんな事を考へてゐる内に、次第に食事開始の時間になつた。

『偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に
与えたもうたことを感謝いたします』

「この1年間……いや、生まれ変わつてから17年間、食事の度に
この言葉を口にしてきて慣れてしまつたが……未だに思つ。」

「これだけ豪勢な料理を前に、何がささやかな糧だ、とな。

そして、食事が終わると、サンガを連れて午前の授業だ。

大学の講義室を思い出させる作りの教室で、今日はシューヴルーズによる『土』系統の授業だ。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功の様ですわね。」のシューヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのですよ」

と、教室を見渡していたシューヴルーズのおばさんが、ルイズの横の才人に気付く。

「おやおや。変わった使い魔を召喚した物ですね。ミス・ヴァリエール」

「…………あははははははっ……」

シューヴルーズのおばさんが惚けた声で言いつと、教室中が爆笑した。
あ、俺は笑つてないぞ？

「『ゼロ』のルイズ！召喚できないからって、その変歩いてた平民を連れてくるなよ！」

俺の隣に座つてたマリコルヌが、野次を飛ばす。

すると、ルイズが立ち上がって怒鳴つた。

「違つわー。きちんと召喚したものー。こつが来ちゃつただけよー。」

「嘘つくなー』サモン・サーヴァント』が出来なかつたんだりつへ。」

教室中が『ガラガラ笑う中、二人の言ひ合いが繰り広げられる。

『ミセス・シュヴァルーズ！侮辱されました！かぜつぴきのマリコルヌが私を侮辱したわ！』

『かぜつぴきだと？俺は『風上』のマリコルヌだ！風邪なんか引いてないぞ！』

『あんたのガラガラ声は、まるで風邪でも引いてるみたいなのよー。』

遂にはマリコルヌも立ち上がり、ルイズと睨みあつ。

やれやれ……マリコルヌのヤツ、ひょっとして実はルイズに気があるんじゃないのか？良くいるだろ、好きな女の子を虜めるヤツが……。

いい加減埒が明かなくなつてきた時、シュヴァルーズのおばさんが杖を振つた。立ち上がつたルイズとマリコルヌが一瞬吊り上げられ、すとんと席に落ちた。

『ミス・ヴァリホール。ミスター・マリコルヌ。みつともない口論はおやめなさい』

シュヴァルーズのおばさんのお叱りで、ルイズはしゅんと頃垂れた。だが、俺の隣の太っちょはどうかな？

『お友達をゼロだのかぜつぴきだの呼んではいけません。わかりましたか？』

「ミセス・シュヴァルーズ。僕のかぜつぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実」

ボコッ！

「痛ッ！？な、何するんだよ、ギーシュ！」

俺はマリコルヌの後頭部を殴った。

「こつまでその悪ふざけを続ける気だ？いい加減にし！」

「う、うう……わかったよ」

俺が軽く睨むと、マリコルヌは渋々引き下がる。

しかし、周りのクスクス笑いは止まない。多分、対象がルイズとマリコルヌの半々になつたんだろう。

そこでシュヴァルーズのおばさんが再度杖を振る。すると、笑っていた連中の口に赤土粘土が張り付いた。

「あなた達は、その格好で授業を受けなさい」

「ひじじてよひやく、教室が静かになった。

「では、授業を始めますよ」

そして始まった『土』系統の授業 シュヴァルーズのおばさんは、

四大系統のおさらいから始め、『土』系統が如何に重要な系統かを語つた。

まあ、便利な系統であるのは間違いないな。俺みたいなチート能力を持つと、それが良く分かる。

で、続いて『鍊金』の実演に入る。

「今から皆さんは『土』系統の魔法の基本である、『鍊金』の魔法を覚えてもらいます、一年生の時にできるようになつた人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさらいすることに致します」

そう言って、石ころを取り出し、『鍊金』をかけるシュヴァルーズのおばさん。

石ころは、真鎗に変わった。知っていたのも勿論だが、俺も土のメイジだからか、見ただけで金属の種類がある程度分かるのだ。

「ハハ、『ゴールドですか！？』セス・シュヴァルーズ！」

大声を上げたのはキュルケだ。

「違います。ただの真鎗です。『ゴールドを鍊金出来るのはスクウェアクラスのメイジだけです。私はただの……コホン、トライアングルですから……』

聞いた話では、トライアングルは努力で何とかなるが、スクウェアは才能がなければなれないらしい。本当かどうかは知らんが……。

「ミス・ヴァリホール！」

その時、シュヴルーズのおばさんがルイズの名を呼んだ。

「は、はい！」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すいません……」

「お喋りをする暇があるのなら、あなたにやつてもいいこまじゅう」

ザワッ！

シュヴルーズのおばさんがそう言った瞬間、教室の空気が凍りついた。

「え？ 私？」

「やうです。ここにあるローリングを、望む金属に変えて御覧なさい」

しかし、ルイズは立ち上がりない。困った様にモジモジするだけだ。

「ミス・ヴァリホール、どうしたのですか？」

「先生」

そこで口を挟んだのは、キュルケだった。

「なんですか？」

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケの言葉に、教室中が頷く。だが、シユヴルーズのおばさんは首を傾げるばかりだ。

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですか？」

「ええ。でも、彼女が努力家という事を聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやつて御覧なさい。失敗を恐れていては、何もできませんよ？」

「ルイズ。やめて！」

またキュルケが声を上げた。だが……それでルイズに火を付けてしまう。

「やります」

ルイズが立ち上がった瞬間、教室中から小さな悲鳴が響いた。そんな中、ルイズは教卓に歩いて行く。

「……こりゃもう止められないな。マリ」「ルヌ、レイナール、机の下に隠れろ」

「「言わねなくとも……！」」

一人とも、いつになく機敏な動きで机の下に潜り、耳を塞いだ。

「サンガ、来い」

『フギヤ』

横で寝ていたサンガを呼びよせ、俺も机の下に潜る。そしてサンガの首根っこを抱きかかえて、耳を塞いでやる。

そして

ドカアーンッ！！

爆音と衝撃が、教室内を満たした。

『フギヤアー？』

「落ち着け！サンガ！恐くない恐くないっ！」

驚いてビクリと跳ねたサンガを、力づくで抑え込み、毛並みを撫でて落ち着かせる。

だが……他の連中は阿鼻叫喚の大騒ぎだ。

「だから行つたのよ！あいつにやらせんなつて！」

今のはキュルケの声だな。

「もう一・ヴァリホールは退学にしてくれよ。」

「俺のラッキーがヘビに食われた！ラッキーが！」

これらは誰かわからん。

サンガが落ち着いたのを確認して、俺は机から顔を出した。

教卓の方では、シユヴルーズのおばさんが痙攣しながら倒れてい
る。その前に、煤で黒くなり、服がボロボロで肩やらパンツやらが
見えているルイズが、何故か平然と立っていた。

ルイズは教室の大騒ぎを意にも介した風もなく、取り出したハン
カチで顔を拭いながら、淡々と言つた。

「ちょっと失敗したみたいね」

その言葉に、教室中が大ブーイング。

その後、水のメイジ達の『治療』^{ヒーリング}で、シユヴルーズのおばさんは
二時間ほどで目覚めたが、『鍊金』の講義は行われなかつた。そし
て、ルイズは教室の修理を命じられた……。

そして昼食後……。

「全く……午前は酷い日になつたな

食後のお茶を飲んではいるが、マリコルヌが愚痴つた。

「いつものことだ。ルイズの事は、天災だとでも思つて諦めるしかないって」

俺は、紅茶を楽しみながらマリコルヌを宥める。

「だけど……ただ失敗するだけならまだしも、ルイズは僕らを巻き込むじゃないか。たまたまんじやないよ」

レイナールまで……。

「もうルイズの話は良いくらいで……。他に話題ないのかよ?..」

と、俺が紅茶を口に運んだ時だった。

「だつたら……なあ、ギーシューお前、今は誰と付き合つているんだよー?」

「ブツ……」

マリコルヌが興奮気味に言つた事で、危うく吹くところだった……。

…。

「誰が恋人なんだ? ギーシュ!」

「はあ……付き合つ? 僕にそんなの女はいない。つていうか、お前らは知つてゐはずだろ? が?」

「なんだよ、別の話題を求めたのはギーシュだら?..」

「そりゃそうだが……、何も俺をネタにする事はないだろ? マコ

「ルヌ」

「だけど、確かに気になる話題ではあるね」

「レイナール、お前もか! ?」

「たく、ビニッシュも……。」

「だつて、君は一年の頃から、その筋では有名じやないか。告白してくる女の子をみんなフツてる、つて

「たく、ミーハーどもめ……。」

「ひょっとすると、君は女の子に興味がない男色家なんじやないか、つていづの噂もある」

「ピキ……!」

「その噂の出所を教える。すり潰していくる……。」

「ま、待った待った！所詮尊だし、どうちかって言うとこは僻みみたいなものさー君がフツた女の子に気があつた奴が、どこかで流した『アマセ』」

「なら言つなー！そして今後、おべびこも出すなー！もじ出したひ……お前をすり潰すぞー！レイナール・マリコルヌもだー！」

「わ、わかつてゐるー！」

「も、勿論だともー！」

レイナールとマリコルヌが、それぞれ顔を引き攣らせて頷く。

しかし、まさかそんな噂がされていたとは……もし噂を流した奴を見つけたら、ホントにすり潰してやらねば……。

「あ、あの……ー」

「ん？」

声に振つ返つてみると、茶色のマントを着た一年生の女子。

「ギ、ギーシュ様……ですよね？」

「やうだが……君は？」

栗色の髪……あーもしかして、この娘は……。

「わ、私つーケティ・ド・ラ・ロッタと申しますつー！」

「俺に、何か用か？」

「は、はい……」「……これ一読んで下せこまつ……」

ケティが目をギュウッと閉じて差し出したのは、一通の封筒 中八九、ラブレターだな。

はあ、困るんだよな……。また変な噂が流れそうだ。

「……悪いが、それは受け取れない」

「つー?」

ケティの身体がビクリと震える。

「君とは、先輩と後輩という関係以上にはなれない」

「ビ、ビツヒてですの……?」

「……涙目でじりぢりを見るんじゃない。」

「理由は簡単。俺に、その気が全く無いからだ」

「つ……わ、わかりました……。つ、うえへんツッ……」

ケティは、泣きながら走り去つて行った。

「はあ……」

溜め息を吐きつつ、俺は椅子に座り直す。この時の罪悪感は、どうしようもないな……。

「相変わらずだな、ギーシュは……」

レイナールが呆れ半分といった感じに言いつ。

「……仕方ないだろ。半端に受け入れた方が、かえつて彼女を傷つけるんだ。この方が良いのや」

「それは、モテる男の余裕か？」

突然、マリ「ルヌが睨んできた。

「俺にだって、選ぶ権利はある」

「ちえつ！モテる癖に、あんな可愛い女の子をフるなんて……！僕なんか声を掛けられたことすらないうつてのに……ブツブツブツブツ……！」

知るか、そんなこと……。

原作でもそうだったが、ここは時々いつやって情緒不安定になるから厄介だ。女関係の事になると特に。

「…………しかし

レイナールに目をやる。

「ん?」「

「こつも、真面目そつな顔して実はムツツリスケベなんだよなあ……。」

「なんだよ?」

「いや、何でもない……。」

レイナールともマリコルヌとも、気が合って友達になつたけど……ひょつとして俺、癖の強い人間の方と気が合つタイプなのか?

なんか嫌だな……。

「ブツブツ……おーい！ ケーキおかわりっ！」

「はー！ ただいま！」

マリコルヌのヤツ……ブツブツ言いながらケーキを平らげてやがつた。っていうか……。

「おー、マリコルヌ。食べ過ぎじゃないのか？ もう5個食べちゃう？ ケーキ」

「次で6個やー。」

そんな細かい事はどうでもいい。

ケーキを6個だと……？ 考えただけで胸焼けしてきた。

と、そこで黒髪にそばかすのメイドが俺達のテーブルに近づいて来た。シエスタだな。

その横には……ケーキが乗ったトレイを持った才人……。

「…………

何か、言いたそうな顔だな……。だが、敢えて言おうとはしない。

原作だと、香水云々で決闘イベントになるんだが……このままだと決闘イベントは無しの方に向こなうしそうだ。

それだと、なんかつまらないな……。いいはひとつ、強引でも俺が切っ掛けを投じてみるか。

「……俺に何か言いたそつだな?そつちの給仕

「別に……」

「言いたい事があるなら言つてみろよ、給仕

「……女泣かせて、ホントにいるんだあ、と思つただけだよ

言葉に棘があるところから察するこ、僻んでるな。よし……。

「それは僻みか?なるほど……確かに、お前はモテなやうな顔だな、給仕

平凡とこつか、特徴が無いというか……。

「う……一ヶ月、王手の色男さんは、悩みがなむけで羨ましいよ。
あと、俺は給仕じゃない」

上手い具合に挑発に乗ってきたな。それにしても、『悩みがなさ
そう』とは……。

「ふん……言つてくれるじゃないか。お前、確かライズが呼び出し
た奴だつたな。悩みが無いのはお前の方だろ。お前からは、濃厚な
『甘つたれ』の気配がする。どうせ、親に甘やかされて生きて来た
んだろう?」

今氣付いたが、俺も結構頭にきてた。腹の底がカツカしてる……。
ガキだな、俺も。

「うむせえボンボン野郎。一生薔薇でもしゃぶつてろ」

何故ここで薔薇?俺は薔薇なんか持つてないのに……。

とはいって、イベントフラグは成立したから、まあいいか。

「どうやら、お前は俺に喧嘩を売つているらしいな。礼儀知らずの
平凡面」

「誰が平凡面だ!」

才人は歯を剥き出して唸る。単純な奴……。

「お~お~、威勢が良いな。よし、食後の運動代わりだ。遊んで
やるよ、甘ちゃん」

「面白え……！」

よしよし、釣れた釣れた。

このイベントはやつておきたかったし、俺としては別の興味もある。俺のチート能力と、才人の『ガンドールヴ』……どっちが上かつていう興味がな。

「こじでやんのか？」

「こじは食卓だ。喧嘩にはふさわしくない。向こいひ、『ヴェストリの広場』と呼ばれる広場がある……そこでやひ。待つててやるから、準備と覚悟が済んだら来な」

才人に挑発的な笑みを向け、俺はその場を後にした。

SIDE：才人

あの野郎……言つだけ言つてせつと行きやがった。

そもそも、あいつは第一印象からして気に入らない。ルイズほどじゃないけど、結構可愛い女の子にラブレター渡されたくせに、それを断りやがった。俺なんか、そんなもん貰つたことすらないのに

。

おまけに俺を『モテなさそう』とか『平凡面^{づら}』とか小馬鹿にしく

さつた。

背も高いし、ガタイも良いし……おまけにハンサム（ムカツク）だけど……、絶対ひと泡吹かせてやるー

「あ、あなた、殺されちゃう……」

「はあ？」

「貴族を本氣で怒らせたら……」

傍にいたシエスタが、なんとか震えてた。

安心させようと思つて、俺は笑いかける。

「大丈夫。あんな奴に負けるかつての。何が貴族だつ」

「つ……！」

ダツ！

「あつーー？」

走つて逃げて行つちました。

なんなんだよ……？もしかして、あいつってそんなに強いのか？

「あんたー何してんのよー見てたわよー」

「よおルイズ」

「『よし』じゃないわよー。何勝手に決闘なんか約束してんのよー。」

「いや、決闘じゃなくて喧嘩だけだ……。」

「あんたー何してんのよー見てたわよー。」

「だつて、あいつが、あんまりにも、ムカつくから……。」

まあ、俺だつて少し挑発する様なこと言つたけど……。

ルイズは溜め息を吐いて、やれやれつて感じで肩を竦める。

「謝つひやこなさこよ」

「なんで?」

「怪我したくなかったら、謝つて来なさい。今なら許してくれるかもしれない……いえ、ギーシュなら許してくれるわ」

「ふざけんなーなんで俺が謝んなくちゃならないんだよー先に馬鹿にしてきたのは向うの方だー。」

「いいから

ルイズが強い調子で俺を見てきた。

「いやだね」

馬鹿にされた俺が、どうして下手に出なきゃならんんだ……ふ

ぞけんなつつのー

「分からず屋ね……。あのね? 手加減はしてくれるだらうけど、あんたは絶対に勝てないし、怪我するわ」

「そんなの……やつてみなぐちやわかんねえだり」

「聞いて? 平民はメイジに絶対に勝てないのー」

「ちえ……また平民かよ。もう聞き飽きたぜ。

「確か……『ヴェストリの広場』はあつちだつて、あの野郎が言つてたな」

俺はルイズを無視して、さつまギーシュとかいう奴が指さした方に歩き出した。

「あ、ちゅつと! ? ああもう! ホントに! 使い魔のくせに、勝手なことばっかりするんだから……ー」

後ろでルイズがギャー、ギャー言つてゐるけど、無視だ無視。

SHADE OUT

わらわらわら……

「……なんだこの野次馬の数は?」

『ヴァエストリの広場』に先に着いて、才人を待っていた俺は、周囲を見渡して思わず呟く。

人、人、人……噂を聞き付けたんだろうが、これは集まり過ぎだろ？

と、呆れていたところへ……才人が到着した。

「結構早かつたな？もう覚悟は出来たのか？」

「うるせえ。覚悟するのはお前の方だ」

威勢の良いことだ……。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民だ！」

誰かがそう言つと、野次馬が騒ぎ出す。暇な奴らだな……。

「………… わたし、じゅう始めるぬか。」 うつむかお邊に立て、素手でも
うつむか

と、俺が言つて自前の杖を地面に放り出した瞬間

ダツ！

才人は俺に向かつて突つ込んできた。

10メートル程の距離を、全力疾走 先手必勝つてか。

「おーりあつ！」

拳を振り上げて、目の前に迫り来る才人。

「せっかちな奴だな……」

パシツ！

「え……！？」

才人が繰り出したメチャクチャな右パンチを、ハ工を払う様に左手で弾く。そしてすかさず腕を取り

グイッ！

「おわあッ！？」

一本背負い。

ドサツ！

「ぐえッ！？」

潰れた蛙の様な声を上げて、地面に背中から落ちる才人。あれは受け身が取れてないな。

「……ふむ」

俺は自分の手を見つめる。

前世の頃から柔道はおろか、格闘技の類は一切やった事がない俺。なのに、今の一^{一本}背負いに繋がる一連の動き……我ながら、まるで流れる水の如く自然で無駄のない動きだった。

どうやら、これも神様がくれた特典の一つらしい。

「へ、ぐ……へ、くそ……！」

おっと、考えていた内に才人が起き上がりってきた。

「……まだ、やるのか？」

「あ、当たり前だ……ツ！」

受け身が取れなくて背中を強かに打ちつけた所為だらう。才人の顔が苦痛に歪んでいる。

「ギーギュー！」

と、そこへルイズが駆けこんできた。

「ルイズか。何か用か？」

「『何か用か』じゃないわよーもうやめて！大体ねえ、決闘は禁止じゃない！」

「これは決闘なんて大袈裟なもんじゃない。ただの喧嘩だ。その証拠に、俺は魔法を使ってないだろ？」

今の俺が『クリエイト・ゴーレム』なんか使つたら、いくらなんでも勝負にならない。決闘だって、周りの奴らが勝手に言つてるだけだしな。

「それは、そうだけど……でも…貴族が平民と喧嘩だなんて……」

「なんだルイズ、随分必死に止めるな? もしかして、あいつに氣でもあるのか?」

「誰がよーやめてよね! 自分の使い魔が、みすみす怪我するのを、黙つて見ていられるわけないじゃない!」

ルイズが真っ赤になつて反論する。

「……だ、誰が怪我するつて? 僕はまだ平氣だつつの」

「サイトー!」

立ち上がつた才人を見て、ルイズが悲鳴のよつた声で叫んだ。

「……へへへ、お前、やつと俺を名前で呼んだな」

才人は、微妙に嬉しそうに笑う。

「わかつたでしょ? 平民は、絶対にメイジに勝てないのよー特にギーシュは、私達の学年の中で、戦闘技能は一番の成績を誇つてゐるよ? あんたが逆立ちしたつて勝てる相手じゃないのよ!」

「……ちよ、ちよつと油断しただけだ。いいからビコテウ!」

才人はルイズを押しやり、一歩前に出た。

「始めておいて言つ台詞じやないとは思つが……無理はしない方が良いぞ？背中、痛むだろ？」

「…………うるせえ」

本当に親切心でした忠告にも、才人は耳を貸さない。俺を睨みながら、ズンズン歩いて来る。

そんな才人の肩を、ルイズが追い付いて掴む。

「やめなさいよ！バカ！どうして向かって行くのよー…？」

しかし、才人はその手を振り払った。

「ムカつくから」

「ムカつく？メイジに負けたって恥でも何でもないのよー」

「うるせえ」

「え？」

「いい加減、ムカつくんだよね……。メイジだか貴族だか知んねえけどよ。お前ら揃いも揃つて無駄に威張りやがって。魔法がそんなに偉いのかよ、アホが」

俺は別に、威張った覚えはないんだが……。

「で？結局続けるのか？」

俺が声をかけると、才人は少し匕つちを睨み、次いでニヤリと笑つた。

「全然きいてねえよ。たかが一本背負い一回決めたぐらいで、勝つた氣でいんな。バカ！」

「ふん……負けん気だけは一人前だな。後悔しても知らんぞ……」

それからはもう、ワンサイドゲームだった。

才人のメチャクチャな拳は俺には全く当たらず……逆に、俺が繰り出す攻撃は……

ガツ！

「ぐあつ！？」

拳も……

ドカツ！

「ぐえつ！？」

蹴りも……

ブンッ！

「うわあッ！？」

投げ技も……

全てが綺麗に決まつてしまつ……。

才人は、幾ら俺に叩きのめされても、立ち上がりつて来る。そして、俺はそうして向かつて来る才人を叩き伏せる……その繰り返しだ。

おかげで、才人はもうボロボロだ……。顔は腫れ上がりつて、口元からは血が垂れているし、服も土埃で汚れている……。

ドサツ……！

そして、遂に才人は倒れた。その才人に、ルイズが駆け寄る。

「お願ひ……もう、止めて」

ルイズの声は涙声だつた。

「……泣いてるのか？お前」

絞り出した様な声で、才人がルイズに声をかけた。

正直、気分が良くない……。まるで、弱い者いじめをしている気分になる。

「泣いてないわよ。誰が泣くもんですか。もういいじゃない。あん

たはよくやつたわ。こんな平民、見た事ないわよ

「同感だ」

俺はそこで口を挟んだ。

ルイズとオ人が俺の方を向く。

「お前……サイトとか言つたな。せつき、お前を「甘ちゃん」呼ば
わりしたことは取り消す。ここまでやるとは、見上げた根性だ。そ
れに……色々言ってバカにした事も詫びる。悪かった……」

「ギーシュ……」

「お前……」

ルイズとオ人が、信じられない物を見る様な目で見てきた。

それと平行して、周囲もざわつき始める。

「……だが、ここまで騒ぎがデカくなってしまった以上、この喧嘩
にも一応の勝敗を付けないとならない。そこで聞く……まだ、続け
るか?」

「…………ああ、続けよ!ぜ」

「サイトー!」

オ人は少し考えた後、身体を起こして立ち上がった。ルイズがそ
れを見て叫ぶ。

本当に、見上げた根性だな……。

俺は、さつき放り出した杖を拾い、呪文を唱えて地面に向けて振り下ろした。

パアア！

才人の目の前の地面が僅かに光り、そこに一本のブロードソードが出来上がる。

自惚れる訳じゃないが、このまま素手の喧嘩を続ければ才人は負ける。そうすると『あ～、やっぱり平民は貴族に勝てないんだ』で話が終わってしまい、才人が惨めになる。特に俺は、ここまで魔法を使つてない訳だし。

原作におけるこのイベントの意味は、『ただの平民だと思つていた才人が、実は凄い力を持つているんだ』とルイズを含めた周囲の人間が認識することにある。

あの疲労困憊の状態じゃ、もうまともに向かつて来る事もできないだろう。だから、もう『ガンダールヴ』の能力に頼るしかない。この目で『ガンダールヴ』の力を見てみたい気持ちもあるしな。

俺も自分の杖に『ブレイド』の魔法をかける。普段黒光りしている鉄の杖が、やや黄色っぽい光の刃を纏う。

「ならば、次で決着をつけよう。その剣を取れ」

俺が言うと、才人はブロードソードに手を伸ばす。しかし、その

手をルイズが阻んだ。

「ダメ！絶対ダメなんだから！あんたもうボロボロのよつ！？これ以上やつたら、本当にどうなるかわからんないわ！もう良こじやないつ！何、意地張つてゐのよッ！？」

「……俺は元の世界にや、帰れねえ。ここで暮らすしかないんだろ」

オ人は独り言を呟く様に、言った。その目は、ルイズじゃなく剣を見ている。

「そうよ。それがどうしたの！？今は関係ないじゃない！」

「使い魔でいい。寝るのは床でもいい。飯は不味くたつていい。下着だつて、洗つてやるよ。生きる為だ。しちがねえ」

「……」

今考えると、この順応力もどこかおかしいな。普通の精神なら、とてもまともではいられない状況なのに……。

もしかすると、この時すでに『ガンダールヴ』のローンによる精神改造が始まっているのかもしれない。まあ、憶測に過ぎないが……。

「でも……」

オ人は、空いた左の拳を握り込む。

「でも、何よ……」

「挑まれた勝負から逃げる様な、卑怯な男にだけは、絶対なりたくないねえ！」

バツ！

才人はルイズの手を払い退け、地面に突き立つた剣を引き抜いた。

「「「「うお——ツツ——！」」」

野次馬共が騒ぐ。

それと、奴らは見てないだろ？が、剣を持った才人の左手のルーンが光っている。『ガンドーラルヴ』の力が発動したようだ。

本当の勝負は、ここからってところか。大丈夫かな、俺……？

「……いくぞ」

「あ、ああ……」

ダツ！

戸惑い気味な才人の返事だが、聞かなかつた事にして駆け出す。
そして

「はああ——ツ——！」

「うおお——ツ——！」

ジャキイイイイインシ！

耳が痛くなるぐらいの金属の激突音
俺の杖と、才人の剣がぶつかり合った音

— 1 —

俺と才人は、お互に無言……背中合わせに立っていた。

見れば、手には杖の姿がない。代わりに、物凄い痺れが残つてゐ

۷

後ろを振り返つてみると……才人の手には、剣が握られていた。
ただし、刀身の半分が無くなつた状態の剣が……。

「……引き分け、だな」

「ああ……」

才人は呟く様に言つと、折れた剣を手放して振り返つた。

俺と才人が歩み寄る中、見物していた連中がまた騒ぎ出した。

「あの半咲、やるじやないか！」

「ギー シュと引き分けたぞ！」

もう、勝手に騒いでる……。

俺と才人はお互^いいすぐ近くまで歩み寄る。

「やるじゃないか」

「へ、へへ……お前も、な……」

と、握手でもしようかと思ったところで、才人が膝から崩れ落ちて気絶した。

「おつと」

地面に突っ伏す寸前で、襟首を掴んで止める。

「サイト！」

倒れた才人を見て、ルイズが駆け寄つてくる。

「心配するな。疲れて氣を失つただけだ。ほら

「ぐー……」

吊り上げてルイズに見せると、才人は鼾いびきをかいていた。

それを見ると、ルイズはホッと安堵の溜め息をつく。

ところで、俺の杖は……？お、あつた。随分飛んでたな。

杖を拾い、寝こけてる才人に『浮遊』^{レピテーション}を掛けて浮かせる。あ～、
樂チン樂チン

「さて……ルイズの部屋まででいいか?」

「え、ええ……！」

ルイズは目を『じごじご』擦りながら頷いた。

その後……才人をルイズの部屋に送り、俺はそのまま帰った。

才人は、疲労はともかく怪我はそれほど酷くはない（そういう戦い方をした）から、それほど大袈裟な治療は必要ないだろう。

とにかく、なんとか無事に決闘イベントを終えられて良かつた。

ペソード3 フーケ現る……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

エピソード3 フーケ現る……

エピソード3

あの決闘から一週間が経過……。早過ぎ?知らんよ、そんなこと。
とにかく、あの決闘の後からをかいつまんで説明しよう。

先ず才人の事だが……あいつは、ぶつ倒れてから丸一日で目を覚ました。

ルイズが、高価かどうかは知らないが、治療用の秘薬を取り寄せて使ったそうだ。

で、傷もすっかり治つた状態で会つた時に謝られた。

「悩みがなさそとか、ボンボンとか……色々言つて、悪かつた。
「めん……」

俺としては、大して気にしていなかつた事なので、そのまま「気にしていない」と言つておいた。

で、それ以降、それなりに話をする様な仲になつた。

次に、ルイズを含む才人の評価だが……概ね上がつたと言える。

シエスタやマルトーを初めとする学院の奉公人（平民）達は、奴を『我らが剣』と呼んで受け入れているそうだ。

ルイズも、まあ表面上は変わらない 些細な事で、股間を蹴り上げたり叩きのめしたり飯抜きにしたり飯抜きにしたり が、少しだけ才人への評価を改めているのは、なんとなく分かる。

あの二人は、あれで上手くやつていいくだろう。

が、ある日……才人に相談を受けた。曰く

「最近わ……キュルケの使い魔のフレイムがさ、なんか俺のこと見てるんだよ。なんでだろ？？」

事情は知っている。どうやら、しっかりキュルケは才人に興味を持つたようだ。

これはデルフリングガー入手に必要なフラグ。そのまま続けさせた方が良い という訳で

「さあ？」

と、すっとぼけておいた。答えは直に分かる。

そして、イベント発生の『虚無』の曜日がやつってきた 。

俺は朝から、サンガに跨り、ブルドンネ街を訪れていた。

サンガを街の外で待たせ、大通り とは名ばかりの狭く「」
ミした通りに面した露店を巡っている。

別に才人とルイズを待つて いる訳じゃない。単純に、休日ショッピングだ。

この世界には、漫画もDVDも存在しないが、代わりに面白い秘薬やマジックアイテムが売られている事がある。FFやドリクエみたいなものだ。

俺の所持金は無限だから、幾らでも買い放題 だからと言つて、山のように衝動買ひはしない。

お、この銀のネックレス、良いデザインだな。

「おい、店主。ここは幾らだ？」

「へえ。こちら、純銀製の首飾りになつまして、お値段が50エギューになりますが」

「買った」

「へえーお買い上げありがとうございますー。」

言つておぐが、これは衝動買ひじゃないぞっちゃんと吟味しての買い物だ。

見た所、このネックには『固定化』が掛かってないみたいだから、後で掛けておかないとな。

その後、秘薬やら本やらを『多少』買いこんで、昼食を取り、土産の肉を買ってからサンガのところへ戻り、サンガの食事が終わってから学院に帰った。

帰りついたのは、夕方。『アレ』が来るのは夜だから、それで休憩するにしよう。

そして、夜が来た……。

一いつの月が照らす中、俺は一人、中庭をぶらぶら歩く。で、しばらくして、ルイズとオ人とキュルケとタバサが現れた。

「なんだ、お前ら？ お揃いで」

「あら、ギーシュじゃない」

俺を見とめて声を上げたのはキュルケだ。続いて、ルイズが言つ。

「こんな時間に、こんなところで何してんのよ？」

「月夜の散歩。そして、今の質問をそつくりお前らに返す」

「……決闘だつてよ」

俺の問い返しに、才人が疲れた声で答えた。

「決闘とは、穩やかじやないな。なんだつてそんな事に？」

事情は知つても、話の流れで尋ねる。それにも才人がげんなり声で答えた。

まあ、原作通りの事情　才人が、デルフリンガーとキュルケが買つてきた剣のどっちを使うかを、ルイズとキュルケが決闘で白黒つけて決めようつてことだ。

「ギーシュ、お前からも何とか言つてくれよ……」

「ハツキリ決めないお前が悪い」

才人の助けを求める言葉を、俺はスッパリ斬つて捨てた。

「だが……魔法で直接戦うのは、確かに危ないな。どっちも、大なり小なり怪我をするぞ」

「確かに、それはバカらしいわね」

キュルケが顎に手を当てて言った。

「そうね」

ルイズも頷く。

と、そこでタバサがキュルケに近づいて何かを呴き、才人を指差

した。

「あ、それいいわね！」

そう言つて笑みを浮かべたキュルケが、今度はルイズに耳打ちする。

「あ、それいいわ」

そしてルイズも頷いた。

で……

「おーい……。本氣か？お前ら～」

ロープで縛られ、塔の上から吊るされた才人が、情けない声を上げる。

その下の中庭には、ルイズとキュルケと俺　　塔の屋上には、シリフイードに跨つたタバサがそれぞれ待機している。

「ギーシュ～！助けてくれよ～！」

「自業自得だと思つて、諦める」

「ここで俺が助けに入ると、『アレ』のイベントに支障が出る。俺の望みを叶えるには、今夜のイベントは必須だ。」

それに何より、下手をすると俺までとばっちりを喰うからな……。

「いいこと? ヴァリエール。あのロープを切つて、サイトを地面に落とした方が勝ちよ。勝った方の剣をサイトは使う。いいわね?」

「わかつたわ……」

キュルケヒルイズが、ルールの確認をする。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらーはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、ビアード

余裕で促すキュルケ。ルイズは硬い表情で、杖を構える。

同時に、屋上のタバサが吊るした才人を風で揺らし始めた。才人が左右に、結構大きく揺れる。

「……」

ルイズは少し悩む。そして、徐に『炎球^{ファイヤーボール}』の呪文を唱え始めた。

そして呪文が完成し、ルイズは気合を入れて杖を振る。

しかし……

ボオオンッ！

火の玉は出^だす、一瞬遅れて才人の後ろの壁 つまり宝物庫の壁が爆発し、亀裂が入った。

「殺す気か——！」

爆風で身体が揺れる状態で、才人が怒鳴る。

「ゼロ！『ゼロ』のルイズ！ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの！器用ね！」

腹を抱えて盛大に笑うキュルケ。

「あなたって、どんな魔法を使つても爆発させるんだからー・あつはつは！」

ルイズは悔しそうに膝をついた。

「さて、私の番ね……」

そう言つたキュルケは狩人の目……。タバサは才人を揺らすが、キュルケは余裕の笑みを浮かべる。

そして、慣れた調子で『炎球』^{ファイヤーボール}の呪文を唱え、杖を振つた。

ボオウツ！

直径20センチ程の火の球が飛び、才人を吊るすロープを焼き切る。

才人は落下するが、タバサが『浮遊』^{レピテーション}でレスキュー 地面に激

突はせず、ゆっくりと降りた。

「あたしの勝ちね！ヴァリエール！」

キュルケは勝ち誇り、ルイズはいじけて草をむしる。

まあ、じつちの事情は俺にとつてはどうでもいい……。

さあ、壁には亀裂が入ってるぜ。せつせと来い、『土くれ』のフレーム。千載一遇のチャンスだぞ

と、心の中で思い続けていた時

ズゴゴゴゴ……

来た！『土くれ』のフレームの十八番 三十メートルの土くれゴーレム！

「な、なにこれ！？」

ゴーレムに気付いたキュルケが、田を見開く。

そうしている間にも、ゴーレムはキュルケの方 正確には、宝物庫の壁の方に歩いて行く。

「あやああああああああ！」

キュルケは悲鳴を上げて逃げ出した。色々偉そうなこと言つて、いつも時は逃げ出すのかよ……。

「おー！置いて行くなよ！」

才人は逃げ出したキュルケに向かって叫ぶが、キュルケは聞こえなかつたようだ。

その間にも、ゴーレムはどんどん迫っていく。

「な、なんだこいつや！ デケえ！」

才人はジタバタもがく。が、如何せんグルグル巻きの海老フライ状態で逃げられない。

「……」
「……」

「ダツ！」

「才人！ 今ロープを切つてやるから動くな！」

俺は杖に『ブレイド』を掛けて、才人を縛る縄を切つた。

「サンキュー！ ギーシュ！」

「礼はいいからお前はルイズを連れて逃げる！ 僕も逃げる！」

「ダツ！」

早口で言い残し、俺はその場から逃げだした。

いや、もちろんまともに戦えば勝てるぞ？ だが……ここでフーケを撃退したんじゃ駄目なんだ。色々と、段取りつてものがな。

その内、俺と才人とルイズはタバサのシルフィードにレスキューされて、上空に逃れた。

その後、ゴーレムはルイズがいれた亀裂から、宝物庫の壁をぶち破り、フーケは中から『ロケットランチャ破壊の杖』を奪取 ゴーレムで逃げて行つた。

そして翌朝…… 学院は大騒ぎとなる。

「『土くれ』のフーケ！ 貴族達の財宝を荒らしまくつているという 盗賊か！ 魔法学院にまで手を出しあつて！ 隨分と舐められたもんじやないか！」

「衛兵は一体何をしていたんだね？」

教師達は、現場である宝物庫に集まつて「コチャコチャ」と勝手な事を言い合つていた。

その内容は、建設的とは程遠い……。

「衛兵などあてにならん！ 所詮は平民ではないか！」

あてにならないと知つてゐるなり、あんたらがしつかり警戒しろよ……。

「それより当直の貴族は誰だつたんだね！」

「という教師の発言で、シュヴァルーズのおばさんがビクリーと震えた。

「ミセス・シュヴァルーズー当直は貴女なのではありますか！？」

そう追及したのは、教師の一人で『疾風』のギターだ。

シュヴァルーズのおばさんは、震えながら泣きだす。

「も、申し訳ありません……」

「泣いたって、お宝は戻つてこないのですぞーそれとも貴女、『破壊の杖』を弁償できるのですかなー！？」

「私、^{わたくし}家建てたばかりで……」

やれやれ……責任の所在が分かると、途端に追及が始まる。こういう場面は、見るのは嫌いだ……。

「これこれ。女性を苛めるものではない」

やつとオスマンのじいさんが現れた。

その後、ギターは食い下がつたが、オスマンじいさんの「当直をまともにした教師は何人いるか？」発言で静まり、責任の追及合戦は打ち切られた。

」の時ばかりは、オスマンのじこさんを尊敬したね。

で……今度は俺達の事情聴取だ。オスマンじこさんに促されたルイズが、代表して事情を説明した。

「あの、大きなゴーレムが現れて、こここの壁を壊したんです。肩に乗つてた黒いメイジがこの宝物庫の中から何かを……その『破壊の杖』だと思いますけど……、盗み出した後、またゴーレムの肩に乗りました。『ゴーレムは城壁を越えて歩き出して……、最後には崩れて土になっちゃいました』

「それで？」

「後には、土しかありませんでした。肩に乗つてた黒いローブを着たメイジは、影も形もなくなってました」

「む……」

オスマンじこさんが、難しい顔で髪をしゃぶる。

「後を追おうにも、手掛かり無しどうわけか……」

と、そこでオスマンじこさんが、ふと気付いてコルベールのオッサンに尋ねた。

「じゃあ、ミス・ロングビルはどうしたね？」

「それがその……、朝から姿が見えませんで」

「「」の非常時に……、何処に行つたのじゃ

「エリなんでしょう?」

噂をすれば影　そこでタイミング良く、ミス・ロングビルが現れた。

「ミス・ロングビル! 何処へ行つていたんですか! 大変ですぞ! 事件ですぞ!」

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「調査?」

オスマンジイさんが怪訝な顔で言ひつ。

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査を致しました」

「仕事が早いの。ミス・ロングビル」

そりや、ロングビルはフーケだからな。俺は知つてゐるから思うのかもしだれないが、誰一人ロングビルの迅速過ぎる行動を不審に思わないってのは、どうなんだろ? な?

「コルベールのオッサンが慌てて促す。

「で、結果は？」

「はい。フーケの居場所がわかりました」

「な、なんですよー。」

「コルベールのオッサンを筆頭に、教師達がどよめく。

「誰に聞いたんじゃねー? ミス・ロングビル」

「はい。近在の農民に聞きこんだところ、近くの森の廃屋に入つて
いく黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケ
で、廃屋はフーケの隠れ家ではないかと」

オスマンジィさんの問いに答えるロングビルの言葉に、今度はル
イズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ? それはフーケです。間違いありません!」

「そこには近いのかね?」

「はい。徒歩で半日。馬で4時間といったところでしょうか」

「じゃあ往復8時間ついことだ。どうして誰も疑問に思わない……?」

「すぐに王室に報告しますよー! 王室衛士隊に頼んで、兵隊を差し
向けてもらわなくてはー。」

コルベールが叫んだが、オスマンが目を見開き、結構な迫力で怒
鳴る。

「馬鹿者！王室なんぞに知らせている間にフーケは逃げてしまつわ！その上、身に掛かる火の粉を口で呑みぬよつて、何が貴族じや！この件は、魔法学院の問題じやー当然、我らの手で解決するーー！」

で、オスマンじいさんは咳払い落ち着き、その場の全員を見渡した。

「では、捜索隊を編成する。我と思つ者は、杖を掲げよ」

よし、行こう。俺は杖を掲げた。

「ミスター・グラモンー！」

シューヴルーズのおばさんが、声を上げた。

「何をしていいのですーー？あなたは生徒ではありませんかーー！私は教師に任せで……」

「では、誰か行くんですか？」

「…………」

俺が田を向けると、教師達は田を逸らした。

誰も行く気はない、と……。どうしようもないな、この教師陣は……。

「誰も行かないみたいですね。なら、俺が志願しなければ捜索隊が成り立たないでしょ。ここは、この『白金』のギーシュにお任せ

しゃがね

あれ

隨分名乗るのが遅れたが、俺の一つ名は『白金』曰く、『白金』のギーシュ。『白銀』じゃなく、『白金』と書いて『しきん』のがミソだ。

その一つ名の由来は、近い内にお見せしよう。

と、俺に続いてルイズが杖を掲げる。

「ミス・ヴァリエール！」

シユヴルーズのおばさんがまた声をあげた。他の教師達も、同じ様に驚き顔でルイズに注目した。

更に、キュルケも杖を挙げる。

「ミス・ツヒルプストーー君までー！」

今度はコルベールのオッサンが声をあげる。

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ」

更に続いて、タバサも杖を掲げる。それを見て、キュルケが声を掛けた。

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから

「心配」

キュルケは感動した表情で、タバサを見つめる。ルイズも、タバサに感謝を述べる。

「ありがとう……タバサ……」

そんな三人の様子に、オスマンじいさんは好々爺っぽい笑みを浮かべて「うむうむ」と頷いた。

「そうか。では、君たちに頼むとしようつか」

「オールド・オスマン！私は反対です！生徒達をそんな危険にさらすわけには！」

「では、君が行くかね？ミセス・シユヴルーズ」

「い、いえ……、私は体調わたくしがすぐれませんので……」

結局行かないなら言つなよ……。

「彼らは、実際に敵を見ておる。その上、ミス・タバサは若くしてシユヴァリエの称号を持つ騎士だとも聞いているが？」

じいさんの発言に、教師達を含め、キュルケとルイズも驚いた表情でタバサに注目する。

『シユヴァリエ』か……、確かにその称号を取ると國から年間500工キューの年金が出るんだよな。まあ、俺は自分で幾らでも金貨を作れるからあんまり意味ないけどな。

「ミスター・グラモンは、トリステイン王國の武門の名門グラモン伯

爵家の出で、戦闘技能において学年一の成績を誇る強力なメイジだと聞いているが？」

そりゃあ、チート能力持ちの転生者ですから。

「ミス・ツェルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなり強力であると聞いているが？」

キュルケは、じいさんの褒め言葉に得意げに髪をかき上げ、不敵な笑みを浮かべる。

そして、最後にじいさんはルイズに目を向けたが、そこで少し言葉を濁す。

「ミス・ヴァリエールは……その、数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いておるが？しかもその使い魔は！」

汗ダラダラ……。

辛くもルイズを褒めることに成功したじいさんが、誤魔化す様に声を上げて才人に目を向ける。

「平民ながら、そこのミスター・グラモンと決闘して引き分けたとう噂だが」

決闘……。最初はただの喧嘩のつもりだったんだが、まあ、最後は剣で勝負までしてしまったし……もつ決闘でいいか。

「！」の面子に勝てるところがいるならば、一步前に出たまえ

じじさんといつになく威厳のある声で言つた台詞にて、反応できる者は誰もいない。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

「――枝にかけて――」

「俺、ルイズ、キュルケ、タバサの四人が同時に声を上げ、それぞれ礼を取る。

「では、馬車を用意しよう。それで向かうのじや。魔法は田地に着くまで温存したまえ。ミス・ロングビル！」

「はい。オールド・オスマン」

「彼らを手伝つてやつてくれ

「元よりそのつもりですわ」

ロングビルはオスマンに一礼し、準備に取り掛かると言つてその場を後にした。

さあて……いよいよ来たぜ、フーケ討伐イベント。だが、俺はフーケを討伐なんてする気はない。

もつと平和的な解決を目指すのだ……平和的な、フフフ。

エピソード4 人材確保……（前書き）

（注意）この作品はファイクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

エピソード4 人材確保

エピソード4

パツカ、パツカ、パツカ……

フーケ捜索隊　　という名の討伐隊に志願して、現在馬車に揺られて街道を移動中。

席順は……御者席にロングビル、荷台右側に俺、才人、ルイズの順、左側にキュルケ、タバサの順だ。

道が殆ど整備されてない所為で、ガタガタ揺れて仕方がない。

「ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

キュルケが、黙つて手綱を握っていたフーケことロングビルに声をかけた。

「いいのです。私は、貴族の名を失くした者ですから」

「だつて、貴女はオールド・オスマンの秘書なのでしょう？」

「ええ、でも、オスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘らないお方です」

「差しつかえなかつたら、事情をお聞かせ願いたいわ」

しかし、ロングビルは答えない。他人に話せるような軽い事情じやないからな……。

「いいじゃないの。教えて下さいな」

キュルケは荷台から身を乗り出して、ロングビルにじり寄りつとする。

ヒュッ！

俺は杖を引き抜き、キュルケの目の前に突き出した。

「つーな、何よ？ギーシュ」

「貴族の名前を失くした理由なんか、他人に話すよつな事じゃない。それにお前、最初に『差しつかえなかつたら』って言つただろう？ミス・ロングビルは差しつかえあるから言わないんだ。それを興味本位でしつこく聞き出そうとするのは、感心しないな」

「……ふん」

キュルケは面白くなさそうに鼻を鳴らし、荷台に座りなおした。

「暇だからお喋りしようと思つただけじゃないの」

「なら、もつと楽しい話題を振れよ」

「……」

俺のキツ目の言葉に腹を立てたが、キュルケは視線を逸らした。

誤解がない様に言つておくが、俺は別にキュルケが嫌いな訳じゃない。だが、誰と限らず、他人に無遠慮な態度が嫌いなだけだ。

「ふつ……」

小さく噴き出したのはルイズだった。キュルケがやり込められたのが可笑しくて嬉しいらしい。

それはキュルケの耳にも届いたらしく、笑ったルイズをジロリと睨む。

しかし、それも一瞬の事　　すぐに思いついたように余裕の笑みを浮かべ、才人とルイズの間に割り込んだ。

俺は、サッとキュルケが元座つていて空いた場所に移った。

「ダーリン　　はい、これ」

キュルケは色氣たっぷりに流し目を才人に送ると、金色で柄に宝石っぽいガラス玉を付けた剣を渡した。

ありや安物だな……。

「あ、ああ……」

才人はそれを受け取る。その時にチラッとルイズの方を見た。

「勝負に勝つたのはあたし。文句はないわよね？『ゼロ』のルイズ」

「……」

キュルケが勝ち誇り気味に言つたが、ルイズは顔を逸らして何も言わなかつた。

だが、俺の位置からはルイズの表情が若干見える。物凄く悔しそうな、屈辱を堪えている顔……、本当にわかりやすい小娘だ。

そういうしている内に、馬車は森に入つた。

「ここから先は、徒步で行きましょう」

馬車が入れない細い道の前で、ロングビルがそう言つた。

俺達は馬車から降り、彼女の先導のもと道を進む。隊列は、ロングビル・俺・ルイズ・才人・キュルケ・タバサの順だ。

「なんか、暗くて怖いわ……、いやだ……」

「あんまりくつつくなよ」

「だつてー、すゞぐー、こわいんだものー」

後ろで、キュルケと才人のじやれる声が聞こえるが、無視だ。先を急ぐ。

そして、開けた場所に出た。

森をくり抜いたような空き地、その中に佇む元木こり小屋の廃
屋　俺達は森の茂みからその廃屋を眺める。

「わたくし私の聞いた情報だと、あの中にいるといつ話です」

その話を聞いて、俺達は取りあえず作戦会議を始める。

タバサが地面に絵を描いて作戦を説明した。

先ず偵察兼囮が小屋を偵察　　で、フーケがいれば誘き出し、い
なけばその合囮を出す。

フーケがいて（いないけど）、外に出てきたら俺達の魔法一斉集
中砲火で即時粉碎　以上が、タバサの作戦だ。

「で、偵察兼囮は誰がやるの？」

「お前に決まってるだろ」

才人の質問に、俺が即答する。すると、他の女達が一斉に頷く。

溜め息をひとつ吐くと、才人は諦め顔でキュルケの安物剣を鞘か
ら抜いた。

「俺かよ……はあ」

ビュンツ！

で、『ガンドールフパワー』で素早く廃屋に駆け寄り、窓から中を覗き込む。

そして凡そ10秒程して、才人は頭の上で腕をクロス 誰もい
ない合図を出した。

ガサツ……

俺達は、茂みから出て小屋に近づく。

「誰もいないよ」

才人が窓を指さして言った。そりや、フーケは俺達の間近にいる
んだから、この中にはいないわな。

「……」

タバサが、ドアの前に立ち、杖を振つて『ディテクト・マジック探知』を使う。

「異はないみたい」

そう呟いてドアを開け、中に入つて行つた。キュルケと才人も続
く。

「私は外を見張るわ」

ルイズは外に残つた。

そして俺は……

「じゃあ、俺とミス・ロングビルは辺りを偵察してくる

そして、僅かに戸惑うロングビルと連れ立つて、俺は再び森に入つた。

「それではミスター・グラモン、私は向こうの方を偵察してきますので……」

「体よく一人になろうつたつてそういうかんぞ。

「偵察なんか必要ない。『土くれ』のフーケはここにいるんだからな」

「つ……ど、どうこういふのですか！？」

「下手な芝居でしらばっくれるんじゃない。あいつらは気付いてないが、俺はあんたが『土くれ』のフーケだと分かってるんだよ、ロングビル。それとも、マチルダと呼んだ方がいいか？」

「…………」

さすがに隠しきれなかつたようで、驚き田を見開き、そして警戒の表情になるロングビル……いや、マチルダ。

「…………ビード、その名前を知つたの？」

「情報源は明かせない。だが、俺は隠れた情報通だ。あんたの事は色々と知つてるぞ、マチルダ・オブ・サウスゴータ

「……お見通じつてワケ」

マチルダは俺を鋭く睨みつけると、こいつでも戦闘態勢が取れる姿勢になる。

まあ、当然だな。いきなり思いもしなかったところから、過去の自分の名前が出て来たんだ。何を言い出すかわかつたもんじゃないと思うのが普通。

「そう睨むなよ。俺は別に、それを言ひ触らしたりはしないし、あんた……つまり『土くれ』のフーケをとつ捕まえようとも黙つていんだ」

「……じゃあ、何が狙いよ?」

さて、ようやく交渉の始まりだ。

「簡単な話さ。マチルダ、あんたを雇いたい」

「はあ?」

おお、見事な間抜け面一目が点になつていいー！

まあ、マチルダの間抜け面は置いといて……交渉の続きだ。

「もちろん、相応の報酬を用意する。先ず……あんた今、ウエストワッジの孤児院で子供達を養つているだる?」

「……そんなどまで知つてゐるのかい?」

「まあな。で、その子供達だが……俺が養つてやる」

「なんだって？」

「……」
「俺は隠れ金持ちでな。トリステイン国内に、幾つか屋敷も持つてゐる。その内の一つを、孤児院の子供達とあんたにやる。内乱続きのアルビオンよつも、ずっと『安全なはずだ』

「……それは」

「更に、あんたには給料として月100Hキュー払つ」

「つー? ……へ、へえ、随分と高給じやないの」

マチルダが少し震えながら言った。

まあ無理もない。月100Hキューといつ事は、年間1200Hキューといつこと……つまり『シユヴァリH』の年金の倍以上。

今、マチルダは迷つてゐるが、俺の話が本当なら良い話だが、いつこつ話には『裏』があるものだと、彼女は知つてこむ。

「……ひとつ、聞いてもいい?」

「ひとつと言わば、幾らでも聞いてくれ。答えるかどうかは、質問の内容次第だけだな」

「……じゃあ遠慮なく聞くよ。あんた、何であたしにそんな話を持ち掛けの? 盗賊のあたしを、そんな至れり尽せりの高待遇で雇お

うなんて、普通考えないわ。何か……裏があるんじゃない?」

ほらな。

この場で俺の首を狙わるのは、多分、俺の得体が知れないからだろう。下手に手を出すと、何をするかわからない……。

マチルダは、過去の経験から『貴族』つてものを嫌悪している。そして同時に、人を疑つてかかるのが癖になつていてるはずだ。

だからこそ、慎重 わざわざ藪を突いて、蛇を出すような真似はしない。そして、それは俺も同じ。

「勿論、いくら俺が金持ちだからって、誰でも彼でもせつせと助けるほど、お人好しじゃない。俺にも計画つてものがあるんだ」

「計画?」

「なあに、大したことじやない……。ウザつたいブリミル教と、その総本山であるロマリアに消えてもらつ計画だ」

「な、なんですつてつ!？」

マチルダがまた目を見開いた。

ブリミル教殲滅計画 これは、俺がこの17年の間に考えてきた計画だ。その全貌はまだ伏せておくが、上手くいけばこのハルケギニアが抱える問題の大部分が解決できる。

王様になろうとか、新しい宗教を立ち上げて教祖の座に納まろう

とか、そんな事は考えていない。

だが、俺は今のブリミル教とロマリアがどうにも我慢ならない。現教皇のヴィットーリオは、確かに『先』の事を考えて強引な手段を使わざるを得なかつたのかも知れないが……それでも気に入らないものは気に入らない。

俺の計画なら、あいつらみたいな強引な手段を使わず、平和的に問題を解決できる。

「マチルダ……あんたは今のロマリアやブリミル教をどう思つ？ 同教どもは『異端審問』をタテに威張り散らし、エルフをただひたすら『恐ろしい敵』だという認識をすり込んで民心を説かした……。過去何度も『聖戦』なんてくだらない戦争を起こしては、ハルケギニアを疲弊させてきた……。こんな国や宗教が、正しいと思うか？」

「……宗教云々は、正直あたしはどうでもいいんだけど……、そうだね……あたしもロマリアはいけ好かないよ。あたしが貴族の名を失つたのも、元を連ればその所為だからね」

マチルダの実家 サウスゴータ家は元アルビオン貴族で、彼女の父親はサウスゴータ太守だった。そして、今は亡きアルビオン王弟モード大公に仕えていた。その繋がりで、サウスゴータ家はティファニアとその母親であるエルフの女性を自らの領地に匿い、アルビオン国王によつて家名を取り潰された。

何とか逃げ延びたマチルダとティファニアも、出自を隠し、身を隠し、ひつそりと生きていく事を余儀なくされている。

俺もこれから、あと精々5、60年ぐらいの人生をこのハルケギ

ニアで生きていく。生きていくからこそ、もつと住み良い世界であつて欲しい。

だから……

「だから、俺はブリミル教をまとめて叩き潰す計画を立てた。その為にはマチルダ……あんたの協力が必要なんだ。俺に手を貸してくれないか?」

「……確かに、あんたの話は面白かったわ。だけど……あんたが信用できるかどうかは別よ。それにそんな大それた計画を、たかが学生のあんたに、本当にやれるのかっていう疑問もあるしね」

まあ、そう簡単に首を縊に縛つてはくれないか。

だが、力を示す方法はある。

「だつたら、一つ勝負をしないか?」

「勝負?」

「そうだ。これからあんたは、俺達を土ゴーレムで襲う。そして俺がゴーレムで応戦する。俺達が倒れたらあんたの勝ち、俺が土ゴーレムを撃退したら俺の勝ち。あんたが勝った場合、その先は好きにすればいい。俺が勝つたら、あんたは俺の下で働いて俺の計画に協力する。どうだ?これで少なくとも、俺の実力を知る事が出来るぞ?」

「ふうん……」

『面白くない……』と、マチルダの口が言っていた。

マチルダにも、フーケとして数多の貴族達から財宝を巻き上げてきたプライドがあるんだろう。自分の実力にも、相応の自信があると見た。

だからこそ、勝負を持ち掛けた訳だが……。

「……いいわ。その勝負、乗つてあげる」

交渉成立 魔法のガチバトルなら、俺は負けない。これでマチルダはゲットだ。

「……勝負を承諾した以上、約束は守れよ?」

「ええ」

余裕の笑み……、俺に負ける事なんかほとんど考えてないな、マチルダ。

だが残念!俺は、チート能力保持者『白金』^{しろがね}のギーシューリーによ、俺の二つの由来を見せる時が来た。

「じゃあ……俺が小屋に戻つたら、勝負開始だ」

「いいわ。言っておくけど、手加減はしないわよ

「それは俺も同じ事だ」

俺とマチルダは、お互いに挑発的な笑みを浮かべ合つて、その場

で別れた。

そして、俺はルイズ達と合流する。

既に、キュルケ、タバサ、才人の三人は廃墟から出て来ていた。
しかも『ロケットランチャー破壊の杖』を携えて……。

「ギーシュ！ どうだつた？ フーケはいた？」

「……」

尋ねてきたキュルケに、俺は両手を上げて、肩を竦めてみせた。

と、その時

ズゴゴゴゴ……

背後で何かがせり上がる気配……！

振り返ると……土が盛り上がり、30メートルの土ゴーレムが現れた。

「フーケのゴーレムだわ！」

キュルケが叫ぶ。

すかさずタバサが呪文を呴き、杖を振った。

「オオオオオッ！！」

タバサの杖の先から竜巻が巻き起つて、ゴーレムにぶつかる。しかし、「ゴーレムはビクともしない。

それを見て、キュルケも杖を胸の谷間から抜き出し、呪文を呴く。

「『ファイヤー』……」

杖の先から火炎が飛び、ゴーレムに当たる。

ボオオオッ！

だが、ゴーレムは表面が焦げただけで、殆ど利いていない。

「お前ら、下がつてろー！俺がやるー！」

俺はゴーレムの前に立ち、杖を構える。

「下がつてろつて……一無理よこんなのー！」

「退却」

キュルケとタバサが言つて、空からシルフィードが降りてきた。

後ろを振り返つてみると、キュルケとタバサがさつやひととの背中に登り、才人もレイズの手を引いてその傍に行く。

「おい、ギーシュー何やつてんだー!? 早く来いよー！」

才人が俺を呼ぶが、俺は逃げる必要はない。

何故なら……この勝負、俺が勝つからだ。

いいから、お前ら下がって見てろ！」

木を地面に突き立てる様は構え
吸文を吹く

九月号

俺を中心に、広範囲の地面が光り輝く。

なんたー！？

シルフィーに乗り込んだ才人が声を上げる。

「これから見る事に
学院のみんなには『外廊禁だぞ』！」

学院にハレると駆かれて面倒たかに

才人達に怨を押し
俺は魔法を完成させる

さあ、本邦初公開……これが俺の本領、
による最大最強のゴーレム！！

「出でよシ一白金の『破壊男爵』ツー！」

„Городъ Городъ Городъ Городъ Городъ

光る地面から、そいつはせり上がる様に現れた。

全身を覆う銀白色の全身甲冑^{フルブリートアーマー}、筋骨隆々の太い腕、背中にはためく甲冑にV字に横線が入った留め具で留められた巨大マント、身長57メートル、体重550トン（計つた事ないけど）の巨大ロボ^{…もとい、巨大ゴーレム…！}

元ネタは勿論『武装鍊金』は、坂口照星の全身甲冑^{フルブリートアーマー}の武装鍊金である。

ちなみに『白金^{しろがね}』と銘打つちゃいるが、白金^{プラチナ}製ではない。白金^{プラチナ}はモース硬度4.5で、鉄より若干固いがソレ単体だとそんなに高い強度を持っている訳ではないんだ。

勿論、全部白金^{プラチナ}で作る事もできるが……俺の破壊男爵^{バスター・バロン}はもつと凄い金属で出来ている。

こいつを形成するメイン素材は『タングステン』というモース硬度7.5を誇る希少^{レアメタル}金属だ。

前世の頃にふと『世界一固い金属って何だろう?..』と思い、インターネットで調べて知った。戦車の装甲や、対戦車用・対艦用の徹甲弾の弾芯にも使われていたらしいぞ。

「巨大ロボおーーーツツツ！…？？」

「「なにアレ?——ツツツ！…？？」

聞こえてきたのは驚きの声……。最初のは才人で、次にハモつていたのはキュルケとルイズだ。

俺は**破壊男爵**^(バスター・バロン)の頭の上に立つて、周囲を飛びシルフィードに目を向ける。

「こいつが俺の切り札、**白金**^(しるがね)の『**破壊男爵**

^(バスター・バロン)』だー…さつきも言つたが、学院の連中には内緒だぞつ…！」

まあ、実際に見なければ信じやしないとは思つが……。

それはさておき、とつとつこの勝負に決着をつけるとしよう。

破壊男爵^(バスター・バロン)で、マチルダの土ゴーレムを見下ろす。土ゴーレムは、こっちを見上げながら固まっていた。

なんせ土ゴーレムは、**破壊男爵**^(バスター・バロン)の半分ぐらいの背丈しかない。大人と子供ほどの差がある。

「……やれ、**破壊男爵**^(バスター・バロン)」

グワッ！

俺の命令で、**破壊男爵**^(バスター・バロン)が拳を握り込み、その剛腕を振り上げる。

そして……

ブウンツツー！

風を切る音を上げながら、振り下ろした。

ズガアアアアアアンツツツー！！！！

土ゴーレムは、衝撃にほんの少しも耐えられず、粉々に砕け散つた。

「…………ひょっとやつ過ぎたか？」

破壊男爵(バスター・バロン)の拳を中心に、森の空き地が酷い事になってしまった……。

例えるなら、隕石の衝突？余波で、廃屋まで木つ端微塵だ。

まあ、それはさておき……土ゴーレムが再生しないところを見る
と、再生するだけ無駄とマチルダが悟ったようだな。

何にせよ、これで勝負は俺の勝ちだ。

その後、破壊男爵(バスター・バロン)を地面に還し、キュルケ達からの質問攻めをのらりくらりとかわし、苦笑いを浮かべて森から出てきたマチルダと合流 フーケは取り逃がしたが『破壊の杖』は取り戻せた、という事で俺達は学院への帰路についた。

で、オスマンのじいさんに報告

ちなみに、報告には『フーケのゴーレムは、俺達全員で何とか擊退した』という事にして、俺の破壊男爵(バスター・バロン)の事は予定通り秘密にしておいた。ルイズ達にも、しつこく念を押しておいたしな。

それで取りあえず、『破壊の杖』は無事に取り戻せたので、一件落着ということになった。

だが、じいさんは申し訳なさそうに言つていたが……、フーケを捕えたならともかく、学院が奪われた宝物を取り戻しただけでは、『シユヴァリエ』の爵位申請は流石に無理、だそうだ。

キュルケとルイズは少し残念そうにしていたが、元々『シユヴァリエ』のタバサや地球人の才人、そして……既に目的を達している俺は、普通にしていた。

俺の今回の目的は、信頼できる実力と性根を持つた人材 つまりマチルダの確保だ。

それが果たせた以上、御の字といふところだらう。

そして、今日のもう一つのイベント 『フリッギの舞踏会』 の時間。

アルヴィーズの食堂の上階のホール、豪華な料理が並べられ、着飾った生徒や教師がダンスやら談笑やら……。

キュルケは男を侍らせ、タバサは料理を食いまくり、才人はバルコニーで黄昏、ルイズはまだ現れてない。

俺はダンスの誘いを断りつつ、飲み食い……ふむ、ちょっと腹いっぱいになってきたな……。

才人にでも声をかけてくるか。

「 ょお、 じりした? 随分と景気が悪そつだな」

バルコニーに行つて声をかけると、才人は本当に景気が悪そつな顔で振り返つた。

「ギーシュか」

「『ギーシュか』つて、またテンションの低い.....」

「ほっとけよ」

才人がまた外を向いた。

『家に帰れるかも知れねえと期待して、思い過ごしだつたつて落ち込んでもんだよ』

別のところから声が説明した。

そつちに顔を向けると、錆びたボロ剣のデルフリングガーがあつた。しかし..... そつか。やつぱりオスマンのじいさんにて、『ロケット・ランチャー破壊の杖』の事を聞いたか。

「 ああ..... まあ、それはまた、なんというか.....」

「別に、無理に慰めてくれなくていいよ」

「 そつか.....」

確かに、今の才人をどう慰めたらいいのかわからん。

虚無魔法に『世界扉』があるにはあるんだが……使い手があのヴァーワード・ドアイットーリオだ。奴は才人をただで帰そうとは絶対にしない。

ルイズが使えるようになるかも知れないが、いつになるか分から
ないし……。

『といひでよ、貴族の小僧つ子。ひとつ聞きてえんだが……』

「あん？」

『なんでお前、俺が喋つてゐるのに驚かねえんだ?』

「…………あ、インテリジェンスソードか」

『遅えよッ！』

デルフリンガーがツッコミを入れてくる。

何とか咄嗟にギヤグっぽく返して誤魔化したが……危ない危ない、うつかりしていた。

俺は今の今まで、デルフリンガーが喋ったところに立ち会つていなかつたんだ。気をつけないとな……。

「ヴァリエル公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエル嬢のおなづり……！」

おつ、ルイズが来たみたいだ。

さてと、じゃあ俺は退散しますか……。

「じゃあ、俺はもう行く。お前も、あんまりくよくよするなよ。いつか、良いことあるわ」

「ああ……」

生返事……。ドレス姿のルイズに田が釘付けってか。まあいい、邪魔者はさっさと退散だ。

しかし……。俺は才人から離れながら考える。

あいつら、大丈夫だろ？ とか？ シゴーレムを俺があつさり潰したから、才人とルイズの関係が進展しない、なんて事になると……。

いや、それはあいつらの問題か。まあ、もし関係が悪化して二人がすれ違う様な事があったら、才人は俺が保護してやるでしょう。

と、考えていた時……

「ミスター・グラモン」

女性に声をかけられた。だが、いつもの有象無象の女共ではない。

声の主は、本日ゲットしたマチルダだ。

「こんばんは、ミス・ロングビル。黒の『ロープドソフ』が素敵ですね」

『ロープドソフ』っていうのは、フランス語で『イブニングド

レス』^{ハルケギニア}のことだ。『いつちの言葉はフランス語に近づいて、この言
いで意味が伝わる。

「あつがとついでります。ミスターのタキシード姿も素敵ですよ」

「それはどうも。……で、わざわざ声をかけてきたい要件は？」

「ふふ……私と一曲、踊っていただきませ」と、ジントルマン

恭しくレスの両脇など持ち上げ、膝を曲げての一礼……だが、
その顔は何とも挑発的な笑み。

ただダンスのお誘いってだけじゃなさそうだ。ふふん、いいだろ
う。

「喜んで、レディ」

俺も見た目恭しく一礼で返したが、マチルダに向けるのは挑発的
笑みだ。

そして、俺達は並んでホールへ向かい、ダンスの輪に加わる。

「……それで、このダンスのお誘いはどういう風の吹きまわしだ？」

わらわらとダンスを踊りながら、周囲に聞こえない程度の音量で、
俺はマチルダに尋ねた。

「あら、『挨拶ね？こんな美人のお説いだつて言つて』

「美人は否定しないから、自分で言つたな。……眞面目な話、このダンスのお誘いにはどういった意図があるんだ？」

あれだけの事があつて、俺をダンスに誘つなんて、裏が無い方がおかしい。

「雇い主と親睦を深めたい、っていうのは理由にならないかしら？」

「ならなくはない。が、お前の性格を考えると、それだけが理由とは到底思えないな」

「あら、言つてくれるじゃない」

「事実だらう」

「まあね」

クルツと回りながら、不敵に笑い合つ俺達……。

「じゃあ、本題に入るけど……あの時、あんたが言つたこと、本気かい？」

「どのことと言つて居るのか知らないが、お前に言つた事は全部本気だ」

「……信じて、良いんだろうね？」

「勿論だ。間違つても、お前らを王国に売つたりは絶対にしない」

「……取つあえず、信じておくわ」

「結構」

話を終えた俺とマチルダは、そのまま音楽が終わるまでダンスを踊り続けた。

だが……その日の事は、かなり注目を集めていたらしく……。

翌日、俺が歳上趣味で、ミス・ロングビルドアキetingとかいうあらぬ噂が流れてしまった……。

当然、力尽くで揉み消したが……、とんでもないオチがついたもんだ。

エピソード4 人材確保……（後書き）

マチルダ、ゲットだぜ！…という回でした。

この先、原作の流れを利用しながら、ロマリアを陥れる計画が進んで行きます。

これ以降、ヴィットーリオやジュリオのファンの方には、不快な表現が出てくるかもしれませんので、ご注意ください。

パート5 アルビオンへ……（前書き）

注意）この作品はファイクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

今回、アンチアンリエッタ分多めです。ご注意を。

エピソード5 アルビオンへ……

エピソード5

フーケ事件が終わってから数日が経過……。

俺の介入で、幾らか原作とは状況が変化している。

先ず、マチルダの事 フーケとして捕まらなかつたので、あいつは今まで通り、学院でオスマンじいさんの秘書として働いている。が、今は学院にはいない。

あいつには今、アルビオンに行つてもうつっている。目的は、ティファニア達の迎えと……アルビオン王家保有の始祖の秘宝『始祖のオルゴール』の奪取だ。

その為に必要な費用と、ある小道具を渡してある。

「なんだい？この指輪は？」

「『アンドバリの指輪』って知ってるか？」

「え？ええ……ラグドリアン湖の『水の精霊』が守つてゐるっていう、アレでしょ？」

「そうだ。生きた人間は生きたまま、死んだ人間には偽りの命を与えて、意のままに操るマジックアイテム……」

「ま、まさか……、これが……？」

「いや、違う。それは俺が『アンドバリの指輪』を真似て作ったマジックアイテムだ」

水系統の魔法に『制約^{ギアス}』といつ心を操る催眠術の魔法がある。現在は国法で『禁呪』に指定されている魔法だ。

マチルダに渡した指輪には、その魔法が込めてある。指に嵌めて念じれば、相手の精神を一時的に支配できるという代物だ。しかも、その間の記憶は飛ぶように細工してある。

マチルダの盗賊としての腕と、あの指輪があれば、警備が厳しい王国の宝物庫にも何とか忍び込めるだろう。

ちなみに、マチルダに頼んだのは『始祖のオルゴール』だけだ。

どうせ、俺も近い内にアルビオンへ向かう事になる。その時には、ウェーブズはワルドに殺されているだろうから『風のルビー』を頂戴する予定だ。

何しろ、始祖関連のアイテム　特に覚醒に必要な『始祖のルビー』は、俺の計画には必要不可欠だからな。できるだけ手元に集めておきたい。

という訳で　今頃マチルダは、アルビオンに先行してニューカッスル城に向かっている頃だろう。

で、次いでルイズと才人の事　思った通り、フーケの事件での

やり取りが無かつたせいで、あいつらの関係はあまり進展が見られない。

それでも『使い魔のルーン』の効果か、元々の趣向か、才人はルイズから離れようとはしない。

ルイズも何だかんだで、多少は才人が気になつてゐるようで、付かず離れずといったところだ。この程度の差異なら、問題になる事はないだろう。

そんな感じで、迎えた今日　トリステインの王女アンリエッタがやつてくる日。

嫌味のギターの授業の最中のこと……。

「あややや、ミスター・ギター！失礼しますぞー！」

金髪ロールのジラを被り、ゴテゴテしたローブで着飾つているつもりのコルベールのオッサンが乱入してきた。

「おっほん。今日の授業はすべて中止ありますー。」

そう言つた後……

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

と、のけ反つた拍子にジラが落ちて……

「滑りやすい」

タバサの一言で教室が爆笑の渦に包まれたのは、原作通りの展開。俺は前世で『ドリフの大爆笑』を見て、お笑いにはちょっとつるさいから、あの程度では笑わなかつたが。

「黙りなさい！ええい！黙りなさい小童どもが！大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！貴族は可笑しい時は下を向いてこっそりと笑うのですぞ！これでは王室に教育の成果が疑われる！」

で、気にしていた頭の事を笑われてゴルベールのオッサンが怒鳴り散らして、教室が静肅に オッサンも氣を取り直して説明を続けた。

「えーおほん。皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとつて、良き日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

ゴルベールのオッサンは横を向くと、あの格好で後ろ手に手を組む。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

はい、アルビオン行き 『風のルビー』回収フラグ来ました。

「したがつて、粗相があつてはいけません。急なことですが、今から全力を挙げて、歓迎式典の準備を行います。その為に本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること」

といつ詫で、授業は中止 僕達生徒は、準備の為に各自部屋に戻った。

と言つても、俺は改まつて身だしなみを正しはせず、時間までのんびりしていただけだ。

そして……王女様」一行が、学院に到着あそばされやがりますて……。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな———り———ツ！」

と、呼び出しの衛士のトカイ声が響き、馬車から出てきたのは……マザリー二極機卿。

「「「「「ふん……」」」

周りの連中が一斉に鼻を鳴らす。分かりやすい奴らだ。

だが、マザリー二極機卿は意にも介さず、馬車の横にズれて、次いで出てきたアンリエッタの手を取つた。

「「「「わあ———」」」

今度は歎声……本当に分かりやすい奴らだ。

まあ、確かに見た目は綺麗だけど……、お頭つむの中がなあ。

「くあ～……」

思わず欠伸が出る。

「おい、ギーシュー麗しの王女殿下が出てこられたっていつのこと、
欠伸をするとは何事だ！？」

傍にいたマリコルヌに怒られ……

「相変わらずだなあ、ギーシュは……。君は、アンリエッタ姫殿下
にも興味がないのかい？」

同じく傍にいたレイナールに呆れられた……。

「……仕方がないだろ？。幾ら見田麗しいアンリエッタ王女殿下と
いつても、俺達には高嶺の花……。手が届かないと思えば、興味も
持てないぞ」

「はあ～……、相変わらず枯れてるなあ、ギーシュは

「まつとけ」

さつきまで怒っていたマリコルヌにも呆れられた……。

だが気にせず、また王女一向に口をやむ。すると……王女の護衛
の中に、ワルドの姿を見つけた。

羽帽子に、似合ひもしない髪……。

髪が似合つてない以外に変なところはなく、見た目は國を裏切るようなタイプには見えない。だからこそ誰も奴の裏切りに気付けないんだろうがな……。

そして、そのまま何事もなく歓迎が終わり、夜になつた……。

俺は女子寮の入口が見渡せる場所に身を潜め、アンリエッタが来るのを待つていた。

そして、一時間程した時……アンリエッタはやつてきた。

「…………」

キヨロキヨロ……

黒い頭巾をすっぽり被り、周りを警戒しながら女子寮に入つて行く。

俺は、気付かれない様に気配を消して、その後を追つた……。

拳動不審のアンリエッタは、塔の階段を上がり、通路の奥の突き当たりの部屋の前で止まつた。俺は、通路の角に身を隠して様子を窺つている。

「…………」

キヨロキヨロ……

また辺りを警戒するように見渡してから、ドアを叩く。

「ン……ン……ン、ン、ン、ン

ノックをして数秒後、ドアが開いてブラウスを身に付けたルイズが出てきた。

「……」

キヨロキヨロ……

ルイズも辺りを見渡して警戒し、アンリエッタを招き入れた。そして、ドアが閉まる……。

「……」

暫し待つ……。今頃、アンリエッタが部屋の中で『^{ディテクトマジック}探知』を使っているはずだ。『^{ディテクトマジック}探知』は長くても10秒ほどで終わる。

一応、念の為20秒待つ。

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、
14、15、16、17、18、19、20……。

「……よし、『^{サイレンサー}消音』」

フツ……

俺は周囲の音を消し、素早くドアの前に走った。

そして『消音』^{サイレンス}を解除 鍵穴から中の様子を窺う。

「ああ！ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀は止めて頂戴！あなたと私はお友達！お友達じゃないの！」

「もつたいないお言葉で」やがてます。姫殿下

見れば、アンリエッタとルイズが抱き合っていた。別に、卑猥な意味じゃないぞ？

「やめて！」には枢機卿も、母上も、あの友達面をして寄つて来る欲の皮の突つ張った宫廷貴族達もいないのですよ！ああ、もう、私には心を許せるお友達はいないのかしら。昔馴染みの懐かしいルイズ・フランソワーズ、あなたにまで、そんなよそよそしい態度を取られたら、私死んでしまうわ！」

俺は王族じゃないから分からないが……王女なんていうのは、そうしたものだと思うがな。

その後、ルイズとアンリエッタは昔話に花を咲かせる。

宫廷の庭で、泥だらけになりながら蝶を追いかけたとか……。クリーム菓子を取りあって喧嘩をしたとか……。アンリエッタの寝室で、ドレスを奪い合つたとか……。幼き日のアンリエッタのボディブローが、同じく幼かつたルイズの腹に決まってくのしたとか……。

最後のはやや物騒な内容だったが、他は至つて普通の仲良し同士の思い出話だ。

で、ルイズの固さが取れてきた所で、アンリエッタは本題に入る。

「結婚するのよ。私^{わたくし}」

「……おめでとうございます」

アンリエッタもルイズも、声も表情も沈んでいて、全然めでたそ
うじゃない。

と、そこでアンリエッタは藁束の上に座る才人に気付いた。

「あら、『ごめんなさい。もしかして、お邪魔だつたかしら』

「お邪魔? どうして?」

「だつて、その彼、あなたの恋人なのでしょう? いやだわ。私^{わたくし}つ
たら、つい懐かしさにかまけて、とんだ粗相を致してしまったみた
いね」

「はい? 恋人? あの生き物が?」

「生き物って言つな」

ルイズのあんまりな言い草に、才人が抗議の声を上げる。

が、ルイズはそれを無視。

「姫さま！あればただの使い魔です！恋人だなんて冗談じゃないわ！」

とかなんとか思いつきり否定してる割には、この後一年ぐらいかけてテレしていく癖に……。

シンデレ娘つていうのは、このシンの時期が面倒臭いから、俺は好みじゃない……。

「使い魔？」

アンリエッタはきょとんとした顔で、才人を見る。

あの顔を見るに……分かっていてルイズをからかった、という訳じゃなさそうだ。

「人にしか見えませんが……」

「人です。姫さま」

才人がワザとらしくアンリエッタに一礼して見せる。顔が、何となく切なそうだ。

そんな才人を尻目に、アンリエッタは少し可笑しそうに笑った。

「そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこ変わっていたけれど、相変わらずね」

「好きでアレを使い魔にしたわけじゃありません」

ルイズが憮然として囁く。

と、アンリエッタは笑みを潜め、再びこれ見よがしに溜め息を吐いた。

「いやく本題に入るな……。

「姫さま、どうなさいたんですか？」

「いえ、なんでもないわ。『めんなさい』ね……、嫌だわ、自分が恥ずかしいわ。あなたに話せるようなことじやないのに……、私つてば……」

「仰つてください。あんなに明るかつた姫さまが、そんな風に溜め息を吐くつて」とは、何かとんでもないお悩みがお有りなのでしょう?

「…………いえ、話せません。悩みがあると言つたことは忘れて頂戴。だの自業自得だ。

「…………いえ、話せません。悩みがあると言つたことは忘れて頂戴。ルイズ」

「いけません!昔は何でも話しあつたじや『ねこませんか!』私をお友達と呼んで下さったのは姫さまです。そのお友達に、悩みを話せないのでですか?」

ルイズがそう囁くと、アンリエッタは嬉しそうに微笑む。

「わたくし私をお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。とて

も嬉しいわ

ヤバい……。」の一人のやり取り、ウザすぎた。

ルイズもアンリエッタもいつそ死んでしまえ、と思つてしまつた。
くそ、計画の内でなければ見捨てられたものを……。

「今から話すことは、誰にも話してはいけません」

アンリエッタはそう言つと、才人をチラッと見た。

「席、外そうか？」

才人が氣を利かせて言つが、アンリエッタは首を振る。

「いえ、メイジにとつて使い魔は一心同体。席を外す理由はありません」

そして、アンリエッタは語り出した。

自分が軍事同盟締結の為に、ゲルマニア皇帝に嫁ぐことに決まつたこと……。それが革命完了間近のアルビオンへの対処であること……。トリステイン侵攻を目論んでいるアルビオンは、アンリエッタとゲルマニア皇帝の婚姻　つまり軍事同盟の締結を阻止しようと血眼になつてその材料を探していることを……。

やれやれ……遠回りに遠回りして、ようやく肝心の話に入つたな。

「で、もしかして、姫さまの婚姻を妨げるような材料が？」

ルイズが蒼い顔で尋ねると、アンリエッタは俯き加減で頷いた。

「おお、始祖ブリミルよ……、この不幸な姫をお救い下さ……」

何が不幸な姫だ、クソッたれが……。利用価値が無くなつたら、真っ先に見捨ててやる……！

「言つて！姫さま！一体、姫さまのご婚姻を妨げる材料つて何なのですか？」

興奮氣味に尋ねるルイズに、アンリエッタは両手で顔を覆つたまま呟き答えた。

「……私が以前したためた一通の手紙なのです」

「手紙？」

「そうです……」

そしてアンリエッタは、自分の口からはソレが『ラブレター』だとは言わなかつたものの、ソレがゲルマニア皇室に渡れば婚姻も軍事同盟も反故になるであろうこと……、ソレがウェールズの手元にあることをルイズに告げた。

「ああ！破滅です！ウーリーズ皇太子は、遅かれ早かれ、反乱勢に囚われてしまふわ！そしたら、あの手紙も明るみに出てしまう！そうなら破滅です！破滅なのです！同盟ならずして、トリステインは一国でアルビオンと対峙せねばならなくなります！」

「では、姫さま、私に頼みたい事といつのは……」

「無理よー無理よルイズ！わたくし私がたら、なんてことでしょーうー混乱しているんだわ！考えてみれば、貴族と王党派が争いを繰り広げられているアルビオンに赴くなんて危険なこと、頼める訳がありませんわ！」

しつかり言つてるじゃないか……。全く、ツツコミビリの満載だな。

「何を仰います！例え地獄の釜の中だろううが、竜の顎あきの中だろううが、姫さまの御為とあらば、何処なりと向かいますわ！姫さまとトリステインの危機を、このラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・フランソワーズ、見過ごすわけには参りません！」

ルイズは跪いて頭を下げる。

「『土くれ』のフーケを退けた、この私わたくしめに、その一件、是非ともお任せ下さいようづ」

それは俺だらうが……。ルイズも大概だな……。

ちよいと早いが、もう出ていくか……、このぐらいなら大丈夫だらう。

「『アンロック』」

魔法で鍵を開け、俺はドアを開け放った。

ガチャツ！

「自分一人でフーケを退けた様な言い方は、聞き捨てならんな、ルイズ」

「ギーシュー？あんた！まさか立ち聞きしてたの…？今の話を…」「立ち聞きなんかしていない。俺はドアの前に座つて、今の話を聞いていたんだ」

「どうちでも同じでしょッ…！」

まあ、その通りだが……ルイズのシックリは取りあえず無視だ。

俺はアンリエッタの前に恭しく膝をつく。

「アンリエッタ王女殿下、御尊顔を拝悦でき、恐悦至極に存じます。先ず、あのような重大なお話を、曲者の如く盗み聞きしたご無礼をお詫びいたします」

正直、こうしてアンリエッタに跪くのは反吐が出る思いだが……今は仕方がない、我慢する。

アンリエッタが困った顔をする。

「まあ、『J一寧にどうも。ですが……、今のお話を聞かれたのは……

「……あなたのお顔前を窺つてもよろしいですか？」

「これは、失礼を。申し遅れました。私、ギーシュ・ド・グラモンわたぐ

と申しますか

「グラモン? もしゃ……あの、グラモン元帥の?」

「不肖の四男でござります」

さて、血筋紹介はこれでよし。わざわざと本題に入らへ。

「殿下。先程仰つておられた困難な任務……、是非ともこのギーシュにも、『命じ下せ』よつ」

「え? あなたが?」

「はっ。若輩の身なれど、私もトリストイン貴族として、殿下のお役に立ちとう存じます。何どぞ」

言つて頭を下げる。必要な芝居だと、割り切つてな……。

「あなたも、私の力になつてくれるとこいつの?」

「微力ながら」

「ありがとう。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。ではお願ひしますわ。この不幸な姫をお助け下さい、ギーシュさん」

「御意」

アンリヒッタやウエールズなんかはどうでもいいが、これでアルビオンに行ける……。

」の後の展開は多少の誤差はあっても概ね分かっているし、『風のルビー』は頂きだな。『始祖のオルゴール』は、マチルダが首尾よくやつてくれていいといいんだが……それはあいつを信用しよう。

「では、明日の朝、アルビオンに向かつて出発すると致します」

今まで黙っていたルイズが、唐突に話を締めた。

「ウエールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及びます」

「了解しました。以前、姉達とアルビオンを旅したことがござります故、地理には明るいかと存じます」

そんな地理は、アテにならない。どうせ、そんなものは関係なく、ルイズ達はウエールズに接触できるから問題ない。

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族達は、あなたの方の目的を知つたら、ありとあらゆる手を使って妨害しようとするでしょう」

アンリエッタはそう言つと、机に着き、羽ペンと紙で……ああ、羊皮紙な。それでウエールズへの手紙を書き始めた。

しかし、妨害か……。雇われた傭兵なんぞどうともなるが、厄介なのは……やはりワルドか。

今は原作と違いは、奴とマチルダが接触していない、そして、才人の事前情報を手に入れていない。だが……原作ではワルドは、

ルイズが『虚無の扱い手』であることを、どうやって知ったのかは分からんが、だいぶ前から知っていた風だつた。

なら、その使い魔である才人の能力にも、ある程度は当たりを付けていると考えるべきか……。

だが……「うん。」この程度の差異なら、それほど大きな影響はないか。

この後、アンリエッタの馬鹿が、ワルドをルイズの護衛に付けるはずだ。アルビオン貴族派に通じている奴にとっては、またとない絶好のチャンスのはず……、動かないはずがない。

才人を侮る分には、奴に隙が出来て悪い事はないし……。俺は恐らく眼中にはないはず……。

もしかすると、ラ・ロシユールの宿で襲つて来る時に、マチルダの土ゴーレムに代わつて奴の『遍在^{パビキタス}』と戦うことになるかもしれないが……、あの襲撃の目的は、俺達とルイズ達の分断とその時間稼ぎ 無闇に俺達と全力で戦うとは考え難い。

色々な状況から考えるに……取りあえず、奴が直接俺の障害になることは、ほほないと言つて良いと思う。原作の流れを元に行動すれば、計画は上手くいくはずだ。

「ウェールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう

と、俺の中で結論が出た所で、アンリエッタが書いた手紙をルイズに渡した。

更に、アンリエッタは右手の薬指から『水のルビー』を引き抜いて、それもルイズに手渡す。

「母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください」

アンリエッタは『水のルビー』をただの宝石程度にしか思っていない。王家伝来の秘宝を、勝手に売り払う許可を出すとは……トリスティンも先行き不安だな……。

この『水のルビー』も頂戴しても良いんだが……、これが無いとルイズが『虚無』を覚えられないし、『ルビー』なら『もう一つ』近くにある。

手元には一つでも『始祖のルビー』があれば、計画には充分だ。放つておいても良いだろ？

「この任務にはトリスティンの未来がかかつています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなた方を守りますよ？」

こうして、アルビオン行きが決まった訳だが……不確定要素が結構あって、さすがに不安だな……。

この件も、無事に片付くと良いが……。

ペソード 6 ワルド現る……（前書き）

注意）この作品はフィクションです。登場人物、設定は架空のものであり、多少作者の独自解釈が含まれます。原作『ゼロの使い魔』とは、違う部分が多くあります。その点をご理解の上で、お読みください。

Hピソード 6

アンリ・ヒッタの尻拭いの為、アルビオンへ行くことが決まった翌朝……。

俺達は学院の門の前で、出発の準備を整えていた。

いつもの制服に足下は乗馬用のブーツを履き、馬に鞍を付け、必要な荷物を纏めて括りつける。そして、それが完了した後……

「行つてくるからな、サンガ。良い子に留守番しているんだぞ」

サンガはテッカくて目立つから、この旅には連れていけない。学院で留守番だ。

『フギヤウ……』

寂しそうな鳴き声を上げるサンガの頭を撫でてやる。

サンガは俺の言ひことひやんと聞くからいとして……、ルイズとオ人を見る。

ルイズは、良く言えば凄い意気込み……、悪く言えば氣負い過ぎ……。そんな固い表情だ。今からあんな感じじゃ、息切れすると思うがなあ……。

才人は……馬に鞍を付けながら、既に疲れた顔をしている。アルビオンへの道のり（その間の乗馬による腰へのダメージ）に不安を感じているらしい。頑張れ、ガンダールヴ。

「おーい！一人とも、準備できたか？」

「とっくに終わってるわ」

「おーい……」

情けない声で返事をするな、才人。

「よし、じゃあ行くか」

そろそろ、ワルドも現れる頃だわ……。

ブワッ……！

ほら来た！

朝靄が揺らいで、デカい気配が降りてきた。そして、少ししてワルドが現れた……。

「やあ、おはよう、諸君。僕は姫殿下より、君達に同行することを命じられた女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

ワルドは帽子を取つて一礼する。

「…………」

チラツと才人を見てみると……、少し驚いて、しかも何やら警戒している様子だ。

ワルドに見覚えがあるようだ。それに……奴に対するルイズの態度も。

「ワルド様……」

馬の傍にいたルイズが、少し震えた声で名を呼ぶ。と、ワルドはワザとらしいぐらいに破顔して、両腕を広げた。

「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」

そう言つて駆け寄り、ガバッと……。

才人は……あーあ、大口開けて……。いきなり抱き上げられる、なんていう行為を半ば受け入れているルイズを見てか、顔が間抜けな事になつてゐる。

「相変わらず軽いな君は！まるで羽の様だね！」

「……お恥ずかしいですわ」

ポツと頬を染めて、『ですわ』ときたもんだ。いつものルイズじゃない……。

「彼らを、紹介してくれたまえ」

ワルドがルイズを下ろし、帽子を被りなおして言った。

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のサイトです」
ルイズの紹介に、俺はお辞儀で返した。才人の方は見えないから
分からん。

顔を上げてみると、案の定、ワルドは俺の事は眼中にない様で、
才人を興味深そうに見ている。

「君がルイズの使い魔かい？ 人とは思わなかつたな」

「僕の婚約者がお世話になつていて
気さくな感じだ……。声の感じは、気さくな中にも本当に驚いて
いるようにも思える。

「僕の婚約者がお世話になつていて

「……」

バツ！

才人が田を剥いて、ルイズを見る。

「……」

ルイズは頬を染めたまま、フイと顔を逸らした。で、才人はまた
ワルドを見る。

と、その顔が段々と諦めの色を帯び始め、ついには溜め息を吐いた……。自分との差を悟つたな。

そんな様子を知つてか知らずか、ワルドはニッコリと笑い、才人の肩をポンポンと叩く。

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖いのかい？なのに！何も怖い事なんかあるもんか。君達はあの『土くれ』のフーケを退けたんだろ？その勇氣があれば、なんだつてできるさ！」

そしてワルドは豪快に笑い飛ばす。才人は、何やら悔しそうで寂しそうな、複雑な表情を浮かべていた。

それにしても……アンリエッタ、いやこの場合は王室全体か。とにかく、こんな簡単に情報が裏切り者に漏れるとは……政治中枢が虫食い状態だなんて、この国に暮らしている身としては[冗談じやないぜ]。

中世ヨーロッパレベルの国家の情報管理レベルじゃ、無理もないかもしだれないが……。

「ピイツ！」

ワルドが口笛を吹く。すると、朝靄の中からグリフォンが歩いて来た。

「おいで、ルイズ」

グリフォンにひらりと跨り、ワルドはルイズを手招きした。

さあて、俺も馬に乗るか……。

その後、ルイズは躊躇いモジモジしつつもワルドに抱きかかえられてグリフォンに……、才人はそんな様子に悔しげな顔をしつつも自分の馬に跨り、よつやく出発となつた。

で、それから、半日……。ワルドは、俺や才人の事なんて、まるで気にせずグリフォンを飛ばし続けている。

途中の駅で一回、俺達は馬を交換したが……ワルドのグリフォンは全く速度が落ちない。このペースだと、今日中にラ・ロシェールに到着しちまうな。

俺はまあ大丈夫だが、才人は……

「…………」

駄目だな……。俺の左隣りで、馬の首にべったりと寄りかかってしがみ付いている。

「あーい、大丈夫か、才人？」

「おーう……」

死んでるなあ……。でも、時々、ワルドとルイズの様子を窺つているところは流石と言つべきか。

ここからじや聞こえないが、ワルドとルイズは今頃、昔の思い出話を中心に盛り上がつてるんだろう。ワルドがルイズを口説きながら、な。

「かなり気になるみたいだな？あの一人の様子が」

「あ？ ど、 ビー ゆー 意味だよ！？」

「俺がちょっと意味ありげに声をかけると、才人が馬から身を起した。」

「言葉通りの意味だ。さつきから、ぐつたりしてる癖にチラチラの一人の様子を、何度も何度も窺っていたこと、この俺が気付いてないとも思ったか？」

「う、うるせえ！」

「やれやれ、分かりやすい動搖の仕方だな。ルイズのどこが気に入つたんだ？お前、あいつには随分、ぞんざいに扱われているみたいだが」「

「だからうるせえって！大体俺はあんなやつ、好きでも何でもねえよ。ま、確かに顔はちょっと可愛いけど、性格最悪」

「うん、まあ、この頃のルイズに関しては同感だ。」

「だが、才人も『意地つ張り』な部分は似たり寄つたり……、ルイズの事をとやかく言えた義理じゃない。」

「ふむ……少し、からかってやるか。」

「はつーまさか……お前、虜められる」と興奮するマジヒストか！？

「誰がマゾヒストだッ！」

「そりゃ、そりだつたのか。しかもルイズの外見から察するに、さては幼女趣味も持つてゐるな？このド変態が」

「うがああッ！…」

才人は咆哮を上げて、馬から直接飛びかかってきた。なんだ、元気じやないか。

だが、残念『ガンドールヴパワー』無しの才人なんざ、俺の敵じやない。

ビシツ！バシツ！ベンツ！

「だツ！？ぶツ！？るツ！？」

眉間への左チョップ、右のビンタ、上から左の叩き落とし、の三連撃が綺麗に決まり、才人は地面に落ちた。

「ふん、俺に襲いかかるうなんざ100年早いわ

「ぐ、ぐぞう……！」

「こりー置いてくぞ！」

ルイズを口説いていたワルドが怒号を放つた、と……はいはい。

「だとよ。才人、早く馬に戻れ」

「おひ……」

ワルドに怒鳴られたのが気に入らないのか、それともその原因を作った俺に指図されたのが納得いかないのか、才人はブスつとして答え、馬に跨る。

と、その様子を見ていたら、才人がフイと顔を背けた。

なんだ?と思つて振り返ると、ワルドに抱えられていたルイズがいた。やれやれ、本つ当に意地つ張りだな……ルイズも、才人も。全く呆れた奴らだ。

そんなこんなで、ワルドは終始マイペースで先を急ぎ 俺達はその日の夕方にラ・ロシェールに到着した。

「なんで港町なのに山なんだよ?」

才人が周りの岩山や、その中に彫り込まれた様な建物を見て言つた。

「山に港があるからだ」

「だから、なんで?」

「山に港が造られたからだ」

「答えになつてねえよ

「気にするな。理由は、船着き場まで行けば分かる」

才人の質問を、のらりくらりとかわしながら、俺は辺りに注意を払う。

と、その時だつた。

ボウツ！

崖の上から、松明が落ちてきた。ワルドに雇われた傭兵どものお出ましだ！

『ヒヒイーーンツー？？』

「うわあつー？」 「くつー」

松明の火に驚いた馬が暴れ、俺と才人は振り落とされた。まあ、俺は落とされる前に飛び降りたが。

ヒュツー・ヒュツー・ヒュツー！

風を切る様な音……矢か！

「ふんツー！」

俺は咄嗟に杖を振り、地面に鉄の壁を生やしてガードする。

カソツー！カカソツー！

壁に矢が当たる音が響く。

「そ、サンキュー、ギーシュ！助かつた」

「いい。だが、面倒な事になつたな」

壁の陰に隠れて傭兵どもの様子を窺う。俺が壁を作つたからか、それともワルドの打ち合わせなのか、もう矢を撃つてこない。

「あんな奴ら、お前のバスター・バロンつていう巨大ロボ……じゃなくて、巨大ゴーレムで一撃だろ？」

「じつは……。

「アホ。こんなところで『バスター・バロン破壊男爵』なんか使えるか。岩場が崩れて道が塞がるし、下手をすると街にも被害が出る」

「あ、そっか……」

「それと……ヒンヒン（『バスター・バロン破壊男爵』の事は秘密だつて言つただろうが。どじで誰が聞いてるか分からんんだからな？）」

「あ、わりい……」

「つたく……、口の軽い奴だ。

特に今は、近場に裏切り者がいる。奴には、俺のことはずアウト。
オブ・眼中でいてもらわなければ困るんだよ。

「大丈夫か！」

ワルドが杖を掲げながら、グリフォンに乗つてやってきた。

「『』覧の通り」

短くワルドに答え、もう一度崖の上を窺つ。

『相棒、寂しかつたぜ……。鞘に入れっぱなしひでえや』

その声に振り返つてみると、才人がデルフリンガーを引き抜いていた。まあ、それはいいか。

「夜盗か山賊の類か？」

「もしかしたら、アルビオンの貴族の仕業かも……」

「貴族なら、弓は使わんだろ？』

「……」

ワルドとルイズの会話を聞き流しながら、俺は『援軍』の到着を待つ。

バツサバツサ……！

『到着。

「　「「うわあああッ！？」」「「『あやあーーッ！？』」「

崖の上から野太い悲鳴 鉄の壁から顔を出して覗いてみると、崖の上の更に上に竜……シルフィードだな。

そのシルフィードの上の人影から、竜巻が舞い起こり、崖の上の野郎どもが吹き飛ばされた。

「おや、『風』の呪文じゃないか」

ワルドが呟く。

ドサササツー！

と、その少し後に傭兵どもが崖から転げ落ちてきた。

「「「ぐう、うう……」」「「あ、があ……」」

呻く傭兵ども。そりゃあ、あの高さから転げ落ちてきた訳だし、死ななかつたのは幸運と言つべきだらう。

が、取りあえず身動きできな様にしておひづ。

ガチーンツ！

『クリエイト・『一レム』の応用で、傭兵どもの両手足を鉄の枷で固める。鍵穴も継ぎ田もないから、魔法を使わないと簡単には外せない。

「シルフィード！」

ルイズの驚いた声に振りかえると、シルフィードが羽ばたいて降

りてきた。

まあ、あつちはルイズ達に任せよつ。俺は、傭兵どもを尋問だ……。

「おい、貴様ら、何故、俺達を襲つてきた?」

「……」

顔を背ける傭兵ども……。ふん、そういう態度を取りやがるか……。

クックック……、ならこいつにも考えがあるや。

杖を、傭兵どもの枷に向けて魔法を使う。すると……

「い、痛でッ！？ いきやあああッ！？ ！」

傭兵どもが叫び声を上げ、のたうち始める。その両手足の枷の間からは、赤黒い血が流れている……。

俺が、魔法で枷の内側に鋭い棘を生やしたからだ。今、奴らの両手足は棘に貫かれている状態なのだ。

腕は手首の動脈が裂け、足はアキレス腱が切れている……。

「もう一度だけ聞くぞ。何故、俺達を襲つてきた?」

「……お、俺達や盗賊だ。盗賊が、金田のもん持つてそつな奴らを襲つて何が悪い……！」

痛みに顔を歪めたリーダー格の男が、俺の質問に若干ドモリながら答えた。

「……」

俺は努めて冷めた目で、傭兵どもを見下ろす。

そして……無言で杖を向けた。

「…………ひ、ヒイイツ！－？」「…………」

恐れ戦ぐ傭兵ども……。俺は、できる限り静かで低い声で問いかける。

「聞くのは三度まだだ。正直に答える……、誰に頼まれた？」

一度目……。

「だ、誰にも頼まれてねえよ……」

傭兵はシラを切つた。続いて二度目……。

「本當か……？」

「ほ、本當だ……！」

まだ言わなか……。見上げた根性だ。

「…………最後だ。本当に、誰にも頼まれていなか？」

「だから、頼まれてねえって！」

最後まで口を割らなかつた傭兵ビも。

一応プロとしての意地か……。それとも最後までシラを切り通せば、何とかなると思ったのか……。まあ、どっちでもいい。

「ふん……」

俺は鼻を鳴らして、杖をしまづ。ここまで言つんだから、例え嘘とわかつていても勘弁してやるといつぱい。

踵を返し、傭兵ビもに背を向ける。

どうせ、放つておけばこいつらの仲間が助けに来る。例え、来なくて失血死したとしても……それはこいつらの自業自得。襲つてきたんだから、返り討ちに遭う事も覚悟の上と受け取る。

我ながら勝手なもんだと思うが、例え俺が付けた傷が原因だとしても、目の前で死ななければ つまり直接殺していないと思えば罪悪感は湧いてこない。

俺の性格が破綻している、とは思いたくないが……。もしかしたら、神様特典で、精神面も強化されて凶太くなっているのかもしない というのは、少し無責任が過ぎるか……。

とにかく、そのまま騒いでいるルイズ達のところへ戻る。キュルケが才人に抱き付いていて、ルイズがワルドと見つめ合っていた。

「子爵、あいつらは自分達をただの盜賊だ、と言つてゐます」

原作に近い台詞を放ると……

「ふむ……、なら捨て置こいつ」

ワルドも原作通りの言葉を吐く。そしてグリフォンに跨り、またルイズを抱きかかえた。

「今日はラ・ロシェールに一泊して、朝一番の便でアルビオンに渡る」

という訳で、俺と才人は各自の馬に、キュルケは才人の後ろに、タバサは本を読みながら自分のシルフィードに、それぞれ乗つてラ・ロシェールの街に入った。

で、取りあえず街で一番だといつ宿『女神の杵亭』とやらに宿泊する事になった。何故かキュルケ達も一緒に……。

「アルビオンに渡る船は明後日にならないと、出ないそうだ」

桟橋に交渉に行って戻ってきたワルドが、椅子に座りながら告げた。

「急ぎの任務なのに……」

同じくルイズも座りながらブスツと呴いた。

「あたしはアルビオンに言つた事ないから分かんないけど、どうし

て明日は船が出ないの?」

「明日が『スヴェルの月夜』だからさ」

キュルケの疑問には、俺が答えた。

「それが、船とどう関係するの?」

「アルビオンは、『スヴェルの月夜』の翌朝にラ・ロシェールに一番近づく。だから、その時を狙つて船を出すと『風石』が少なくて済んで、船乗りはその分儲かる訳だ。そんな儲かる日が2日後に迫っているから、今は船が出ないってことだよ」

「へえ、なるほどね~」

「さて、じゃあ今日はもう寝よう。部屋を取った

説明が終わりキュルケが納得したところで、ワルドがテーブルに鍵を置いた。

「キュルケとタバサは相部屋だ。そして、ギーシュとサイトが相部屋

「……」

才人……なんだ、その日は?口には出さんがハツキリ言って、野郎と一人同室だなんて俺も嫌過ぎるんだからな。

「僕とルイズは同室だ」

「！？」

才人がバツと振りかえり、目を剥いた。

「婚約者だからな。当然だろ？！」

「そんな、ダメよ！まだ、私達結婚してるわけじゃないじゃない！」

ウンウン！

才人が頷く。必死だなあ……。

しかし、ワルドは気にした様子もなく首を振り、ルイズを見つめる。

「大事な話があるんだ。一人きりで話したい」

で、俺達はそれぞの部屋に入つた……。

「ム～ツームゴオ～ツ～！」

俺の隣のベッドで、鉄の錠で両手足が固定され、猿ぐつわを噛んだ才人が暴れている。

なんでそんな格好かというと……、才人は部屋に入つた後、案の定と言うべきか、ルイズとワルドの部屋を覗きに行こうとした。だが、そんな事をすればルイズの才人への好感度が激減する。

もちろん、それはそれでも構わないんだが……何となく阻止しておいた。善意か、惡意か……どちらかは当の俺にもちょっと分からぬ。

だが

うるせえ。

「……イル・ウォータル・スレイプ・クラウディイ」

フワ

「ムガ……つ、ぐう」

『眠りの雲』^{スリーナ・クラウド}の効果で、騒いでいた才人が寝た。やれやれ、やつと静かになつたか……。

才人が寝たのを確認してから、一応、拘束を解いておいてやる。

同じ体勢で寝てると身体に悪いし、明日、俺は惰眠を貪る予定なので、才人が起きた時に懶々拘束を解く為に起こされたくない。

といひ詰で。

「そ、俺も寝よ」

こうして、俺も静かに就寝した。

明日は、夜まで暇だな……。オ人とワルドが決闘するかも知れないが、それは別にどうでもいい。勝手にやってくれ。

だが、一つ気になつていることがある……。『まだ』だとは思つが、一応、確認に行つてみるか。

ペソード 6 ワルド現る……（後書き）

熱々にやられ、仕事に追われ、中々思う様に書けません。次の更新も、いつになることやら……。

それはそれとして……今回、結構多かったと思うのですが、原作に沿う場面において、主人公ギーシュが脇役に徹して動くのは、そうする必要があるから……、ということにしておいてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2539m/>

ゼロの使い魔 ギーシュとして……

2010年10月12日15時43分発行